

町民参加の町史づくり



竹富町史たより

第48号

2021年10月29日



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市新栄町6-18

TEL (0980) 87-6257

目次

〈表紙の解説〉 仲間橋開通式（西表島・東部地区）	1
和衷協力	（佐事 安弘） … 2
『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成 VIII』 発刊！	3
1 書評『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成 VIII』	（慶田盛 伸） … 4
2 1966年をふりかえって	
—『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成 VIII』 を読んで—	（與那國 光子） … 5
3 1966年・波照間・時代転換期最中	（西前津 松市） … 10
4 八重山商工高校誕生前年	
—『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成 VIII』 を読む—	15
西表島の歌謡便覧	17
西表島干立（星立）に関する資料	33
編集後記	39

表紙「仲間橋開通式」（西表島・東部地区）

1992年(平成4)7月29日に行われた、仲間橋の開通を祝う渡り初めの様子。大原小学校の児童が、新しい橋を鼓笛隊のパレードでにぎやかに渡る。

〈表紙の解説〉

仲間橋開通式（西表島・東部地区）

仲間橋は、1956年（昭和31）鉄骨造の仮橋が米軍によって架けられ、その後1968年（昭和43）にコンクリート橋となりました。現在の仲間橋は1992年（平成4）に完成した3代目です。

完成概略図から、橋の長さが250m、歩道を含む全幅員が9.75m、施行年度が昭和63年度～平成4年度であることがわかります。

右上の写真は、大富集落側から河口に向かって撮影されています。開通式の前に撮影されたもので、手前にかかる旧橋の上をバスが通過していくのが見えます。

真ん中の写真では、先導に古見集落の2頭の獅子が見えます。なぜ古見の獅子が先導だったのか、なぜ大富側から大原側へ渡り初めをしたのかは、調べられませんでした。橋の完成を東部地区全体で盛大に祝ったことが伝わります。

また、橋の渡り初めは、高齢の夫婦者または3代の夫婦がそろった一家を選んで行うといわれており、仲間橋の渡り初めには、親・子・孫3世代健在の夫婦として選ばれた、大原集落の新珍健・マイツ夫妻、新善一・波夫妻、新博文・久夫妻が務めています。

他の写真からは、当時の竹富町長・友利哲雄氏、県土木建築部長・澤村宏明氏、八重山土木事務所長・上唐利夫氏、県議会議員・上間毅氏・伊良皆高吉氏らの姿もみえ、大原婦人会の道踊りも開通式に花を添えています。

余談になりますが、この時使用された開通のアーチは、組み立て式の立派なもので、以後「大原まつり」をはじめ、「ばいぬ島まつり」「やまねこマラソン」など、島内で行なわれた各種行事に使用されたということです（西大舛高旬町長談）。

ちなみに、当日の日付は7月29日。「夏の日差しが強かったのでは？」との質問に、「そんなに暑さは感じなかったと思う」、「あの頃は、かりゆしウェアなんてなかったし、クールビズなんて言葉もなかったからね。議会はもちろん、どの会議も全部スーツだったよ」と。議員初当選から2年目の出来事だった仲間橋開通式の様子を、西大舛町長からお聞きすることができました。

（米盛恭子）



和 衷 協 力

竹富町教育長 佐事 安弘



好きな言葉に「和衷協力」^{わちゆうきょうりよく}があります。「心を同じくしてともに力を合わせる」という意味です。竹富島の「うつぐみ」、波照間島の「すむずれ」(肝揃)、黒島の「きむびしち いるびしち」(肝一つ 色一つ) などにも相当する言葉と思いますが、「和衷協力」に思い入れを強くするのは、わが大富の旗頭「太陽と稔り」の旗文字になっているからです。

大富は琉球政府による計画移民の第1陣として、大宜味村、竹富島を主体に久米島、西原などからも59戸303人が、旧仲間村に入植してできた集落です(*1)。それゆえに「和」と「力」が求められました。

私の家族は、私が1歳のとき波照間島から西表島大富に、開拓移民としてやってきました。移住した当時は毎日暮らすのが精いっぱいだったと聞いています。私も進学で島を離れるころまで、食材調達、豚のお産などなど、家のお手伝いは何でもやりました。それだけに家族、地域の協力の大切さを身にしみて実感しています。さらに人は自然、社会と和してこそ生きていけるものと思うのです。

このたび10月1日付で竹富町第11代教育長に就きましたが、竹富町の教育・文化行政でも「和衷協力」の精神で取り組んでいく所存です。

現在、竹富町史編集事業において、『竹富町史 第八巻 西表島』を編集中とのこと。わが大富集落は来年(2022年8月)、入植から70年の節目を迎えますが、竹富町史のなかにどのように位置づけられるのか楽しみであり、時には議論に加わりたく存じます。太陽と稲穂をかたどり、トンボが舞う旗頭のごとく、稔り多い竹富町史の編さんに期待しています。



旗頭は1975年(昭和50)漢那憲福氏より寄贈。

全長: 8.19m、全幅: 1.9m、重量: 29.5kg。

(*1) 『大富開拓記念史 入植25周年』(大富公民館、1977年) 41頁参照。福地景二氏によると、大宜見班は1952年12月に、竹富班は1953年に入植した(『肉親を語る』参照)。

『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成 VIII』発刊！

昨年度（2020年度）、『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成 VIII』が発刊され、慶田盛伸氏による書評（『八重山毎日新聞』2021年8月8日付）を皮切りに、さまざまな反響がありました。

「資料編 新聞集成」のシリーズは、1898年（明治31）4月1日以降の沖縄県内で発行された新聞から、竹富町に関する記事を集成したもので、本書はその第8冊目の刊行となります。これまでは数年ごとを1冊にまとめていましたが、1960年代に入ってから収録記事や、1件の記事に対する文字数が増えたことにより、本書は1966年単独の編集となりました。竹富町史編集事業におきまして、「資料編 新聞集成」シリーズは、沖縄の本土復帰年（1972年）をもって一区切りとしますが、今後は各冊の対象期間を1年として刊行していく計画です。

さて、1960年代は「政治の季節」と呼ばれます。沖縄は、米軍、日本政府、琉球政府が錯綜しながら、本土復帰へ向かって激しく動いていく時代でした。復帰運動は次第に米軍基地問題や人権問題にまで広がっていきました。そのようななかで竹富町は、地域産業の振興、インフラの整備、西表開発などに希望を見いだしていました。

本書は1966年（昭和41）の竹富町に関する新聞記事を収集したのですが、竹富町の島々村々のみならず、世界各地で同時に何が起こっていたのかを考える契機にもなりました。歴史はよく時間軸に沿って語られがちですが、ここで紹介する四つの論考はどれも1966年という時代をそれぞれの地域・立場からとらえ直しています。

歴史を複数の視点から問い直そうとするとき、島という空間は既にその視点を確保しているといえます。また一方、当時のモノ、交通、情報など、さまざまなネットワークの広がりも本書から読みとることができます。このことは情報化・グローバル化が進む現代においても、島の独自性を維持しながら、一人一人の多様な暮らし方がみられることにつながるものでしょう。

新聞記事の年月日は歴史を傍証するものですが、私たちはその時空間を認知することで、先人の功績や個人的なこと、些細な出来事まで、リアルに追想することができます。こういった方法の積み重ねによって、竹富町の歴史を再考したいものです。それは「町民参加の町史づくり」を編む醍醐味で

もあります。

来年（2022年）、沖縄の本土復帰から50年の節目を迎えます。このような観点から改めて『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成 VIII』を読み直すこともできるのではないのでしょうか。

（飯田泰彦）



西表島網取集落 1966年頃（提供：松山 洋）

1 書評 『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成 VIII』

慶田盛 伸

『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成 VIII』（竹富町史編集委員会編、竹富町教育委員会刊）が刊行された。これまでの新聞集成は数年単位で発刊してきたが、今回は1966年（昭和41年）単年。その理由は、掲載記事が多いから。まさに激動の時代ゆえであろう。

同年はイリオモテヤマネコ発見の翌年。先島テレビ開局という情報化社会へ変容していく頃である。同時に島々では人口流出が続いていた。

対象とする新聞は、『八重山タイムス』、『八重山毎日新聞』、『八重山朝日新聞』の3紙。竹富町に関する記事803件を精選し、編年体の時系列で配列している。

一読して印象に残る記事をいくつかあげる。

「西表でカレー栽培」。本土資本と提携してカレーの主要なスパイスであるターメリック（ウコン）、カルダモンなど、主要スパイスの生産をめざす、と記している。

他にも「パイン、畜産で2千ドル農家 上原」、「黒島・波照間の玉ネギ 4万ドル収穫」、「ツノマタ戦後最高の収穫 鳩間」、「西表牛の生産めざす 高那」など。廃村となった新城下地島では「ヤギ牧場荒らされる」の悲しい記事も見える。

「小浜島にキャッサバ振興組合」。数年前に全国を席けんしたタピオカの原料である。西表島で成功したと記している。

それぞれの島で必死に生きる人々が見えるようだ。

また、同書では「附録」として大盛聰氏が「1966年の小浜島」をタイトルとする論文を寄せている。

新聞集成でとりあげた記事に、町民がどのような思いで関わったか、それぞれの島の内側からの視点で検証する試みである。

大盛氏は論文を「小浜島の政治の季節」、「産業振興」、「文化事業」、「小浜婦人会の活動」—に大きく分け、島の社会組織や製糖業、民俗芸能保存活動、織物文化などについて、関連資料を突き合わせて検証し歴史の重層的な流れの中で「1966年の小浜島」を浮かびあがらせることに成功している。

特に、小浜島民俗芸能発表会に関する記述は出色。写真に残る諸先輩方への敬慕の念、舞台と会場の混然一体となった高揚感がかいま見えるようで好ましい。



小浜島民俗芸能発表会（1966年12月3日～5日）

単に「附録」とするには惜しい力作である。氏の島への愛着、熱量の高さが行間にうかがえる。小浜島についての新たな研究者・表現者の登場を喜ぶ。

（『八重山毎日新聞』2021年8月8日付）

② 1966年をふりかえって

— 『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成 VIII』の刊行に寄せて—

竹富町老人クラブ連合会会長

與那國 光子

① 一葉の写真から

くやーなーら。竹富町老人クラブ連合会会長の與那國光子ゆー。

このたび竹富町教育委員会から『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成 VIII』(以下、『新聞集成 VIII』と略記)が刊行され、早速手に取ってみました。『新聞集成 VIII』は竹富町に関する1966(昭和41)年の新聞記事を集めた620ページもの大著です。活字ばかりの地味な資料集というので、最初は敷居が高く思われました。しかし、本書をひもといたとたん、まるで懐かしの流行歌を聞くかのように、当時の情景が浮かんできました。

ちなみに1966年当時、『星影のワルツ』、『悲しい酒』、『こまっちゃうナ』などの流行歌が、ラジオからよく流れていました。思い出の歌を口ずさみながらページを繰るほどに、我が青春時代がよみがえってきました。たちまち私は1966年にタイムスリップしたような感覚を覚えました。

本書の巻頭では、10枚のモノクロ写真が当時の島々へ誘ってくれます。西表島網取村の水田に黄金の稲穂がたわわに揺れる光景をはじめ、西表消防分団の集合写真、小浜島の結願祭の舞台などが紹介されています。

そのなかに「竹富中学校1965年度卒業生」と銘打った写真があります。そこに16名の生徒たちと並んだ、若かりし頃の私の姿を見つけ懐かしく思いました。1966年といえば、私が竹富小中学校の用務として勤めていた頃のことです。当時の校長は徳松信忠先生でした。



竹富中学校1965年度卒業生 (提供：竹富小中学校)

毎朝、デイゴの木に吊るした鐘を鳴らすことから一日が始まりました。その後、先生方にお茶を入れ、忙しく用務

をこなしながら一日一日があっという間に過ぎていきました。夕方、学校が終わったあと、私は東京の高等学校の通信教育で勉強をしました。

私がそうであったように、島の子どもたちは向学心というよりも、広い世界に憧れているようでした。学校の教材も教科書だけだったので、陶芸作家・鈴木八郎氏が竹富島を訪ねられたとき、「子どもたちが本土のことを知りたがっています。古くてもかまいません。ぜひ本土の新聞や雑誌を送って

ほしい」と、思わずお願いしたことがありました。

その後、鈴木氏を中心とした交流の輪が広がり、愛知県春日井市の勝川小学校など、県下数十人近くの方たちから続々と新聞や雑誌、全集物が送られてきてきました。そうして竹富中学校には本土文庫ができあがり、子どもたちは文庫の本を競って読んでいました。このことは当時の『中日新聞』でも大きく紹介されました。

② 1966年の竹富町

『新聞集成 VIII』は、主に「総説」、「収録記事見出し一覧」、「1966年（昭和41年）」、「附録」で構成されています。

「総説」はサブタイトルとして「本巻を利用されるみなさまへ」というメッセージが添えられ、通事孝作さんが1966年の竹富町の動向を概観しています。

ここには「竹富町議会議員選挙を実施」、「西表島開発推進協議会を結成」「沖縄に離島振興協議会が発足」「竹富町出身戦没者の慰霊の塔除幕式および慰霊祭を開催」「新城・下地島は『廃村の島』から『畜産の島』に」「竹富島に電気施設が完成」「鳩間島に無線電話が開通、来年早々は由布島に」「西表島東部に第一東光丸が就航し、航海時間が大幅に短縮」といった時代を反映する8項目が掲げられ、「新聞記事にみる竹富町の諸相」を浮き彫りにしています。これにより当時の時代背景が理解でき、本書を読む良き手引きになっています。

本書が便利なのは、「収録記事見出し一覧」から関心のある記事を拾うことができることです。見出しをみただけでも、「離島苦脱皮は西表開発あるのみ」（1月13日）、「西表開発にいいよいよ本腰」（6月17日）、「宝の島を拓く」（6月21日）など、当時の西表島開発へのまなざしがうかがえます。

西表島開発については当時、琉球・日本・アメリカの三者による協力体制で「西表島資源開発」を行なうことになっていました。記事からは、住民の大きな期待とほうらはらに、遅々として進まない状況を読みとることができます。

このあたりの詳細は、川平成雄先生の論文「西表島開発は、なぜ〈幻〉に終わったのか」（『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成 VII』2019年収録）、「〈幻〉の西表島開発」（『沖縄文化—沖縄文化協会創設70周年記念誌一』2020年収録）をご参照ください。

大規模な西表島開発計画の一方で、竹富島における電気施設の設置事業は着々と進んでいきました。関連する見出しを拾ってみると、「電気導入地域に決定 竹富島に30キロ」（『八重山朝日新聞』2月8日）、「竹富島の電気認可」（『八重山毎日新聞』2月8日）、「徐々に 竹富町 西表西部 医師位置 竹富島も電化へ」（『八重山タイムス』2月10日）、「全町の電化を計画 竹富町 69年度に」（『八重山毎日新聞』2月10日）、「竹富島も電化へ 3月から送電開始」（『八重山タイムス』5月4日）、「文化生活へ一役 竹富電気落成式」（『八重山朝日新聞』7月7日）、「字竹富電気施設完成」（『八重山タイムス』7月7日）、「竹富へ 配電施設に3千弗」（『八重山タイムス』7月7日）など一連の記事がみられます。

これらの記事によると、6月20日、竹富発電所の電気施設を新設。7月初旬から送電開始。3カ月にわたる本土研修を終えて帰島した友利国夫さんが発電機を管理しました。新聞記事により日を追って経緯を知ることができます。記録というのは大事ですねー。

それにしても、竹富島において電気施設の完成は、島にとって文明開化といってよいほどの大事件でした。現在、普通に電気の恩恵を受け、毎日楽しく暮らせるのも、先輩方の尽力のおかげである

な一と、つくづく思いました。

③ 憧れの小百合葉子さん

1966年1月、劇団「たんぼぼ」の八重山公演がありました。劇団たんぼぼの公演は、八重山では3度目ということもあって、娯楽に飢えていた当時の人々は、たいへん楽しみにしていました。

八重山の教育関係者たちは「八重山の子どもらの心にたんぼぼの種を植えつけ、明るく根強い子どもを育てよう」と、劇団の後援会を発足させました（『八重山毎日新聞』1月9日付参照）。竹富島においても、種子取祭の芸能とはひと味ちがった趣向の演劇は珍しく、島人も大いに待ち焦がれた公演でした。

それを『新聞集成 VIII』に収録された一連の記事で確かめることができ、あの時の感動が再びよみがえってきました。

1月7日午後、石垣空港着のエア・アメリカ機で八重山入りした一行15名は、8日の小浜島公演を皮切りに、竹富島（9日）を巡回し、その後石垣島では石垣小学校と伊原間中学校の2カ所で石垣島の児童生徒・一般を対象にして公演が行なわれました（10～13日）。14・15日は与那国島での公演も成功させました。

当初のスケジュールが二転三転したようですが、その強行的なスケジュールには改めて驚くものがあります（『八重山毎日新聞』1月7日・8日付、『八重山朝日新聞』1月8日付参照）。とりわけ竹富・小浜公演では、八潮丸をチャーターし、大きな車に大道具・小道具を積み込んでの巡業でした。まぶしい舞台が今なおまぶたに焼きついています。

劇団を率いるのは、団長であり、主役である小百合葉子さん。劇団たんぼぼの看板女優です。彼女の魅力に多くの人が惹かれました。1月12日の記事に「小浜ではお年よりの方が手を合わせて私を教祖のように拝んだ」（「記者席 小百合さんのすごいファイト」『八重山毎日新聞』）とあるのも、大いにうなづけることです。

かくいう私も彼女に魅力にとりつかれた一人で、1月9日には彼女を訪ね直接お会いすることができました。その後も、ハガキのやりとりをするような、もったいないほどの交流が続きました。亡くなられた後も、ご子息の保さん（当時、浜松在住）を頼って、御霊前に手を合わすことができました。

人との出会いがその人の人生を左右するといっても過言ではありません。私にとって彼女との出会いはかけがえのないものとなりました。スーパーヒロイン・小百合葉子さんは今も私の心のなかに生きつづけ、私を強く励ましてくれます。

④ 「附録」のアジグワー

何事も「シーブン」（「添え分」の義、おまけ）が付いてくるとうれしいものです。『新聞集成 VIII』には、「附録」として『八重山人名録』にみる竹富町、「1966年の小浜島」（大盛聰）が収録されていますが、これが無機質な配列の資料集に何ともいえないアジグワー（味小）を添えています。

『八重山人名録』は、1966年当時発刊されていた『八重山朝日新聞』の第1000号を記念して発刊されたものです。このうち『新聞集成 VIII』には、「八重山群島概観」（1～13頁）、「竹富町」（73～83頁）の箇所を、そのままスキャンして収録したことで、紙面から当時の息吹きがそのまま伝わってきます。

『新聞集成 VIII』を活用するにあたり、当時の八重山を見渡すことのできる資料としてたいへん参考になります。

「八重山群島概観」は、1「位置と面積」、2「人口」、3「気象」、4「産業と経済」、5「移民」、6「観光」、7「教育と文化」の7項目がみられますが、その項目のなかに「観光」がとりあげられているのも注目できます。これらから当時の八重山の状況と課題がよく分かります。どれをとっても現代につながる課題が潜んでおり、これらは当時のことだけでなく、現代においてもさまざまなことを検証するに値する資料といえるでしょう。

また、大盛聰さんの力作論文「1966年の小浜島」を読むと、小浜島の活気ある当時の光景が目に浮かんできます。産業振興については、製糖業の動向を概観しながら、小浜製糖社の「三角糖」が本土市場で好評であったことが、大盛さんの思い出とともに語られています。その他、当時の政治の季節を背景に、「文化事業」として小浜民俗芸能保存会と小浜婦人会の活動がとりあげられていることに興味が引かれました。

前者の特筆できる活動のひとつに「小浜島民俗芸能発表会」があります。これは12月3日から5日の3日間、八重山興行ホールを借り切ったの意欲的な公演であったのが分かります。公演間近になると、地元紙でも盛んにとりあげているのを見ると、その注目度がうかがえます。

『新聞集成 VIII』に収録された「収録記事見出し一覧」から、当時の芸能公演に関わる記事を拾ってみると、わが竹富島に関連するものとして、「西塘会演劇発表会」（11月9～11日、八重山興行ホールにて開催）がありました。

これは石垣在の「西塘会」（郷友会、当時の会長は新井文雄氏）が主催する、共同墓地購入基金造成のための公演でした。「同会員の根本盛吉氏が脚本、入里勉氏が演出、ふり付けした八重山では初めての史劇の発表、外に島独特の民謡から取材した演劇、爆笑劇、舞踊などを盛り込んだ意欲的な作品で大きな期待が寄せられている」（『八重山朝日新聞』11月3日付）とのふれこみです。実際に総勢約50名による3時間を超える公演は大盛況だったようです。

昭和30～40年代、このような資金造成を目的とした芸能公演が、たくさんあったことも懐かしく思いました。

⑤ 『竹富町史』を生かした島づくり

1966（昭和41）年当時はインターネットもなく、新聞が最新の情報源でした。竹富中学生が1泊2日の日程で石垣島一周の修学旅行へ行ったときも、新聞からその動向をうかがい、生徒たちの無事を祈りました。

新聞によると、竹富中学校の生徒43人は10月25日、「徳松信忠校長、大浜美好、仲松国夫、宮良純子、大山スミエ四教諭に引率され石垣市に来島」しました。まず「厚生園に卵のおみやげを持参して慰問、このあと裁判所、地方庁、観光ホテル、二中の淡水プール、八重山毎日新聞社、警察署、竹富町役所、宮良殿内を見学」しました。「卵のおみやげ」についても、「各自の小遣金をよせ集めて卵一箱を慰問品」としてお年寄りに贈ったと報じられています。そして、「26日は石垣島を一周し午後5時進和丸で帰校した」とのことです。

『新聞集成 VIII』をめくっていると、思いもよらぬ真実を知り、なるほど思ったり感心したり。一編の新聞記事からさまざまに呼び覚まされるものがあります。

『八重山朝日新聞』10月28日付にはこんな記事もありました。

「石垣市の産業視察に来市した竹富老人クラブ（前野長用会長）会員60名は2日間にわたって伊原間、川平、名蔵、竹富農協、農試場、二中プール、種畜場、琉球製缶、沖缶、農高などを視察昨日帰

島したが出発に先だち前野会長は、新時代の波にのって知識を広めようと石垣島内の産業視察をおこなったが全員大きな成果を得たと語っていた」（「大きな成果だった 竹富老ク視察終え帰島」）。

『八重山タイムス』10月26日付の〈記者のメモ〉欄では、次のような前野会長の言葉を拾っています。

「老人は健康に留意して、社会のために少しでも役立つよう努力することは、新時代に生きる考えとして、極めて必要であることは、いまさら申し述べるまでもない。そのため知識をひろめなければならないのである」（「新時代に生きる老人」）。

現実を謙虚に受け止め、それを生きる知恵とし、社会に役立てようとする先輩方の姿勢は、令和の時代を生きる私たちにも求められるものでしょう。当時は毎日の暮らしに精いっぱいでしたが、時を経て改めて記事を読むうちに、考えることも多々ありました。

私は現在、老人クラブの活動を大いに楽しんでいますが、『新聞集成 VIII』を活用した活動もできるんじゃないかなーと思った次第です。いみじくも大盛聰さんが「幼いころの記憶がリアルに蘇ってきた」（「1966年の小浜島」）と書かれているように、脳の活性化にもうってつけです。また、学校教育にも取り入れて、そのお手伝いとして島の先輩方がサポートしていくという仕組みも考えられそうです。

老人クラブだけでなく、さらには婦人会や青年会などでも、島づくりの一環として『新聞集成 VIII』を生かすことができるのではないかと思います。また、多くの方に島々の身近な歴史資料として親しんでほしいのです。最も楽しめるのは私たちの世代かもしれませんが、読む人の切り口によっていろいろな成果が期待できるのも資料集の良いところ。料理のしかたは貴方次第です。

（『八重山日報』2021年8月26日～29日連載、『竹富町史だより』への転載につき、改めて「1966年をふりかえって」のタイトルを冠した。）

3 1966年・波照間・時代転換期最中

西前津 松市

『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成 VIII』（以下、『新聞集成VIII』と略記）が扱う1966年（昭和41）は日本復帰を6年後に控えた復帰前夜ともいえる時代の転換期にあり、波照間島も例外ではなかった。筆者の小学6年～中学1年時で、個人的には父親所属のカツオ船・開洋丸の漁に同行し船酔いに苦しんだ思い出がある。小浜島沖でエサのジャコを受け取ると引き返し、波照間、西表の島影がすっかり見えなくなるまで南下したものである。「陸のワザ（業）は男のするものではない」と乗組員の一人が口にしていたのが印象的だった。学校では技術家庭科の時間に、当時珍しかった耕運機（個人所有の新品同様）を操縦ミスで横転させ、借りてきた教師の顔面を蒼白に変えた年でもあった。

① キビ作・製糖一本化へ

「波照間島では畑に一本の草も見られず、下葉のはく葉は徹底され、ネズミが生息しない環境をつくっている」（『八重山毎日新聞』、以下「八毎」と略記。昭41・6・25）。「最悪な事態になる糖業来期も10万トン内外 西表・小浜はさらに減収か」（八毎 昭41・7・22）。「野ネズミの被害と台風の影響が影響した」にも「与那国・波照間は増収」とあり、波照間は前期実績6579トンに対し10140トンと増やしている。

島内にあった三つの零細製糖工場を廃し日本政府の糖業振興法に基づき1961年（昭和36）に波照間製糖株式会社設立、1962年（昭和37）工場建設、1963年（昭和38）に操業開始した中型製糖工場（百屯）の稼働が軌道に乗り始めた頃である。「琉球の含蜜糖工場の技術、経営面の指導で来島した名古屋製糖の領家正幹氏」が「波照間島は十分労働力を充当されていた。地元の人びとも工場は私たちの工場と思ってスムーズに処理されていた」（八毎 昭41・1・16）とあるように島民はサトウキビ一本でいくことを選んだのだ。麦、粟等穀類が畑から姿を消し、田んぼの畦はすっかり崩されサトウキビ畑に組み込まれた。その延長線上に1974年（昭和49）4月1日の「朝日農業」受賞があったのだろう。

「波照間の一周線道路も68年度に計上」（八毎 昭41・11・9）とある。当時集落から海に向かって放射線状に道が何本も伸びていたが、互いに独立した趣で交わることはなかった。そこで一周線道路を通すことでそれらを交差させ、サトウキビ搬出の効率を上げようと企図したのだろう。その後、大がかりな土地改良で土地の平坦化が進むとサトウキビ耕作地が広がり、放射線道路を結ぶ農道も次から次へと通され、久しぶりに帰省した島出身者が道に迷うほどになった。集落外の景観は一変し、いわゆる原風景は失われたのである。

「竹富町もイタチ熱」（『八重山タイムス』、以下「八夕」と略記。昭41・12・27）も見られる。「昨年は113匹導入し、今年は250匹の計画を立て」と野ネズミ対策のイタチがモテモテである。外来種駆除が大きな課題の現在とは隔世の感がある。イタチ導入により後年、ヒバリの鳴き声が聞こえなくなった、ウズラが姿を消した、バズラ（キシノウエトカゲ）やムゴン（ヤシガニ。かつて島民が普通に食した）が激減したという声を耳にすることになる。イタチはそれらをも食したのだろう。

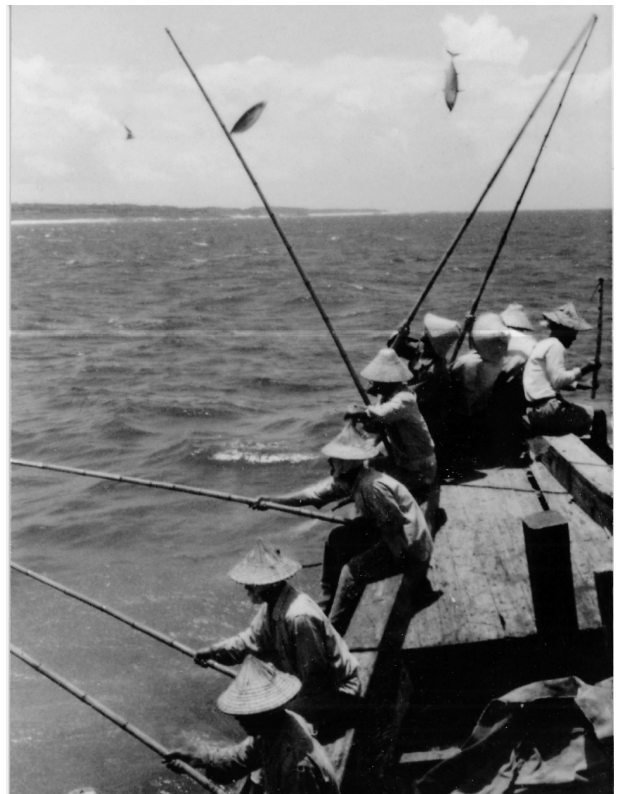
② 斜陽化に向かうカツオ漁

「水揚げ一万斤組も出る 全郡的にカツオ大漁続く 波照間島では各工場が徹夜作業」「昨年と打って変わっての豊漁型」「業者最大の泣きどころであったエサ不足も今年は解消され、特に波照間近海はエサの大群に包まれており」（八夕 昭41・6・1）とある。この頃波照間ではまだ6艘のカツオ船が稼働している。でも最盛期の勢いには程遠かったようだ。現在83歳の男性は中学を出てすぐカツオ船に乗り込んだが、その頃は8艘のカツオ船がフル回転の稼働だったと話した。1艘につき乗組員20人、鯉節製造人7人だから合わせて216人の人手が必要だったとも加えた。夏場漁期には村中にも畑地にも男の姿は見えなかったという。

「波照間港が第一種港に指定される予定」（『八重山朝日新聞』、以下「八朝」と略記。昭41・4・24）とある。「防波堤や港内を浚渫し、台風時に地元漁船や日本漁船を避難させるだけでなく（中略）漁船の大型化、冷凍施設の設置、製造施設の一本化」（八毎 昭41・4・20）等に向かうそれだ。「黒島サクラ口の開通を急ぐ」（八夕 昭41・7・27）ともある。小浜島沖のエサ置き場行き来の際に最短距離となる竹富島東方黒島口を干潮時でも通れるよう浚渫しようというものだ。

民族誌『HATERUMA』を著したコルネリウス・アウエハントは1965年（昭和40）波照間島に渡ったときの様子を次のように記している。「神々しいまでに古風な「八島丸（35・61排水トン）」に乗り、潮の具合と好天のため四時間弱しかかからなかった。船はこうした好条件から竹富島の南、黒島の北を通るコースをとり、二つの新城島のそばをかすめるように進んだ。天候が悪く、潮が引いているときは小浜島をまわって西表島の東海岸に沿うさらに時間のかかるルートを通ることになる」。黒島口は海の交通の要衝だったのである。

他にもカツオ漁に追い風が吹くかに思わせる記事が散見するが、波照間を含め八重山のカツオ漁は衰退の一途をたどることになる。船の燃料費の高騰、エサ不足等の壁があったようだが、波照間の場合は中型製糖工場誕生の影響も大きいだろう。先の83歳の男性によると、所有する農地の少ないカツオ漁関係者が年間を通じて働ける製糖工場に職を変えるケースもあったという。夏場の漁期を除く期間の生活の見通しが立たなかったのである。やがてそういう立場でない人も含めてキビ作・製糖に向かうことになる。「半農半漁の島」であったのが、キビ作・製糖が一大基幹産業の島と化するのである。当時の白保生雄竹富町長は「波照間の漁港が完備した場合（中略）『波照間やジン（金）の島に近くなるヨ』と熱をこめて話し」たようだが（八毎 昭41・4・20）、その予想はすっかり外れたことになる。



（撮影・提供：内藤 哲、1964年）

③ 島内人口の推移

1965年度国勢調査で「竹富町1237人減」（八朝 昭41・2・2）とある。他市町へ転出したのだ。

島民の長年の努力と先見の明により堅実に牛の島を体現した黒島も当時は「気象条件による農業災害が多く発生し、加えて島の自然的条件が悪いため、農業に対する意欲を失い、転出者がいちじるしく増えている。1947年に総世帯数240であったものが124世帯に減っている」（八朝 昭41・8・11）とある。勢い黒島港のすぐ近くで生まれ育った50代前半の女性が、港に行く度に引っ越しする家族の姿があって寂しかったと話したのを思い出した。「ベビーブーム 下り坂 小校への入学児減る一方」（八夕 昭41・2・1）。「（前略）竹富町での新入学児童は（中略）計252名（昨年249名）となり昨年と変動はないようである。しかし、来春（67年）入学すべき者をみると（中略）計169名で83名も減ることになっている。（中略）戦後つづいていたベビーブームは下り坂に向った」ともある。

波照間の場合、1966年（昭和41）の人口は1335人で、それ以前とさほど変わらないし、小学校在籍287人、中学校在籍151人とこちらも同様だ。

他方「今日成人式 竹富町五部落成人なし」（八夕 昭41・1・15）の五部落中に波照間の3文字も見えるし、波照間製糖工場について「名古屋製糖の領家正幹氏が（中略）労務需給は十分あるようだが、高齢化していた」（八毎 昭41・1・16）と指摘するように高齢化は進行していたのだろう。それは出生率の低下を意味するが、児童生徒在籍数が漸次下降線を描いていることからそれがうかがえる。ちなみに「波照間郷友会が高校卒の激励会」（八毎 昭41・3・3）に「波照間から両高校卒業生は14名（農高9、八重高5）」とあるが、14人中当時波照間に戻って定住したものは一人もいなかった。

④ 学習内容満載の修学旅行

「波照間中は（6月）2日午前八時波照間を出発、沖缶に宿泊。3日气象台、漁連製氷所、裁判所、地方庁、町役所、電電公社、文館、毎日新聞、映画見学。四日桃林寺、石垣庭園、宮良殿内、球技大会参加、5日も球技大会に参加。六日は民政府、浄水場、石垣島一周農試場、バラビドーダムを見学。7日午前8時小浜島、大原を経由して帰る」（八毎 昭41・5・28）とある。実に5泊6日の日数である。中身も数多い施設、文化財をめぐる上に映画見学あり、球技大会ありである。そうそう足を運べない石垣島なので、過密とも思える日程を組んだのだろう。炊飯担当の母親が複数人同行し、おいしい料理を振舞ったという。宿泊沖缶（パイン工場）とあるが、パインアップルのシーズンが終わり台湾人女工が引き上げた寮だったという。

「渡し船とともに生きる花田嘉一さん一家 縁の下の力持ち 孫と二人で浦内川の番」（八毎 昭41・1・23）や「浦内川の架橋は3年計画で」「目下設計図作成中」の記事（八毎 昭41・9・28）も臨場感がある。1970（昭和45年）年の竣工なので筆者の中3年時（1968年）の修学旅行の際も日に焼けた花田さんが長い竿で操る小舟で東岸に渡ったものである。50人の生徒だったので、花田さんは「沖縄一幅広い河口」を何往復もしたのだろう。ちなみに旅行団はカツオ船で白浜港に上陸し、「（祖納から）白浜までの政府道はデコボコあり、ドブあり、急坂あり、車がヤットコさーで通れる崩れあり」（八朝 昭41・11・15）の道を祖納までてくてく歩き、西表校で一泊し、翌日は船浦まで歩いて船浦中学校と野球、バレーボールの交流試合をしたものであった。

当時石垣島の学校にあっては修学旅行先を八重山の島々にすることも珍しくなかった。波照間小中

学校沿革誌をひもとくと1967（昭和42年）年に大浜中学校、白保中学校、伊原間中学校が相次いで波照間島を訪れている。中でも大浜中学校と白保中学校は複数年波照間島を選んでいる。かつて明和の大津波で壊滅的打撃を被った大浜と白保に波照間からそれぞれ350人前後疎開を強いられたが、そういう歴史的因縁も関係したのだろう。そのことを裏付けるように「白保小 PTA より学芸会用前幕（ドンズ）1張寄贈受く」（1965年1月19日）、大浜小学校から「台風被害救援の物資を受く」（1965年10月16日）、（波照間の日照り続きに際して）「白保中学校より飲料水三合びん千本の寄贈あり」（1963年5月18日）とある。

今日コロナ禍で万事制約、制限を強いられているが、小中校の修学旅行も例外でない。これまで小学校は沖縄本島に渡るのが主流であったが、本年度は島内巡りを含む学習で1泊2泊等、中学校も例年の他府県巡りは1校もなく、市街地の1中学校は石垣島を拠点に離島に渡る等2泊3日の学習活動を計画している。

⑤ テレビ放送開始2年前

「いよいよTV着工 29日から現場説明 郵政省も来島」（八毎 昭41・8・20）。「先島テレビ視聴料は90セントか」（八毎 昭41・8・3）。離島や石垣島農村部の電気、水道、電話を扱った記事も少なくないが、テレビ開局に向けたものも多い。老若男女問わずテレビ放映を待ちわびていた八重山郡民の姿が目につかふ思いだ。「テレビ現場入札説明 本日からスタジオ皮切りに」（八夕 昭41・9・3）からテレビ放映が刻々と近づいていることが知れる。

ここまで書いたところで興味深い文章が目にとまった。玉城功一氏の「1964年の本土への招待旅行」である（『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成Ⅶ』に収録）。1964年（昭和39）8月に波照間「島の男子中学生2人、女子中学生3名」が東京オリンピックに向け試運転中であり、鉄道の専門家等特別な人しか試乗できなかった新幹線の「夢の超特急」に乗車。車内放送で「琉球最南端の波照間中学校の珍客」と紹介されたとある。その年の3月に波照間に渡った奈良市の帝塚山短期大学の教授と女子学生8人が「島の美しさを思い出しながら、食料の差し入れや民俗芸能などのもてなしに感激し、そのお礼に旅費一切を負担し、島の中学生と引率教師を招待」したという。

石垣島に戻り、電気店の店員から「あなた方が夢の超特急に試乗する様子がテレビに映っていたよと言われ、驚き喜んだ」と結んでいる。テレビ放映はまだ先だが、電気店はテレビ販売促進のため録画した映像を終日流していたのだ。波照間の中学生が試運転の「夢の超特急」に試乗し、「世界最速」に身をゆだねる夢のような出来事は、八重山ではごく一部の人の目にしか映らなかったのだ。筆者も目にしておれば記憶されていたかもしれないと思った次第である。

筆者もたまに石垣島に出た折には電化製品店に入り浸り、東京オリンピックの競技を観て手に汗握り、ビートルズの《girl》を熱唱するグループサウンズのザ・タイガースの姿に「シビレタ」もので



（撮影・提供：石垣佳彦）

ある。

電化製品を扱う店はテレビの販売促進・宣伝のために何度か波照間に出向いたように記憶している。夕刻路上に停めた車の荷台に据えた大型テレビから流れる映像を観ようと、車後方に様々な世代が群がった。

以上、『新聞集成 VIII』中のごく一部記事について触れたが、全記事を読み進めると、つくづくとその時代に波照間の地で思春期を過ごせたことが幸運に思われた。娯楽性が乏しく不便・不自由な生活を経たことも今ではむしろ良かったと思う。大げさに言えば生きる糧のようなものに化してないとも限らない。

遠くにNHKの朝の連続テレビ小説「旅路」のテーマソングが聞こえる思いだ。人形劇「ひよっこりひょうたん島」もなつかしい。1966年（昭和41）の翌々年にそれらは控えていた。部活動の後に理科室でそれらの再放送を汗臭い身体を寄せ合って視聴したものであった。

4 八重山商工高校誕生前年

— 『竹富町史 第十一巻 新聞集成 VIII』 を読む —

緊急の「高校増設」

今年3月発行竹富町史新聞集成VIIIは1966年中の竹富町関連地元紙記事を網羅したものだが、日本復帰前夜という時代転換期さ中ということもあり、そのことがうかがえる記事が満載だが、みだしに「高校増設」の4文字を配した記事もいくつもある。

当時八重山に高校は八重山農林高校と八重山高校の2校。八重山高校には普通科の他に商業科、定時制課程、家政科があったが、さすがに工業系の学科はなかった。それで工業系高校を志望する生徒は沖縄本島の沖縄工業高校などに進むことになるが、それは経済的負担等、ハードルの高い選択であった。よって本来は工業系志望であっても地元の高校への入学を余儀なくされた生徒は少なからずいたと思われる。

八重山ぐるみの運動

そこで「高校増設」に向け八重山政府立高校増設期成会（桃原用永会長）は、不退転の決意で取り組む。

那覇在郷友会から「高校増設について強力な陳情を要するので至急上覇してもらいたい」の入電は臨場感がある。「桃原会長が上覇」「公務で上覇中の浦本市助役・瀬戸竹富町助役とともに主席、文教局長、企画局長、立法院全議員に強く陳情」とある。「四度目の増設陳情」だが、何ともエネルギーな行動力である。前後して期成会は手堅く「石垣、竹富、与那国三市町議会にも要請、立法院議員31名に対して、増設実現要請の陳情電報打電してもらおうよう手配し」ている。

中教委の八重山出身の大浜信光委員からも上覇するよう要請電報が入る。

「高校増設は強力に陳情を要する」との情報提供だ。そこで期成会は「緊急上覇」し多くの政府要人に陳情する。「毎回の陳情には地元選出の星、大浜立法院議員も同行」し、八重山とゆかりの深い西銘那覇市長や高良鉄夫琉大教授などの協力も取り付けている。「高校増設」が中央委で決まった翌日、桃原会長は「これも五万郡民の誠意が天に通じたおかげ」と語っているが、まさに八重山ぐるみ、郷友会等組織・人材総ぐるみの運動の結果であったのだろう。桃原会長の「足が棒になるまで歩いた」「寝食を忘れてやったかいがあった」「夢のような気持ちだ」「よろこびを包みかくしておくことはむつかしいもんだ」の言葉に苦勞の数々と運動が実を結んだ喜びがにじんんでいる。

生徒がグラウンド整備

「科目については沖縄工業あたりに行っている八重山出身を調べてみると機械と電気が多いのでどれにするかこれから検討されるだろう」とあるのが印象深い。悠長の感があるが、まずは高校増設の一念だったのだろう。特に桃原会長は石垣中学校の校長でもあったので、翌年3月に卒業する生徒たちに八重山の地での選択肢を増やしたかったのではなかろうか。

翌年4月開校の八重山商工高校は「A棟とC棟のみが建っており、塀もなく、カヤとバンジローの木におおわれた」グラウンドは体育の時間に生徒が整地作業に当たったとの有名なエピソードがあるが、かといって「高校増設」運動の盛り上がりがなければ八重山商工高校の創立は遅れることになっただろう。

(『八重山毎日新聞』「社説」欄2021年9月25日付)



琉球政府立八重山商工高等学校開校の頃（1967年4月頃）。

164人の入学生を迎えてスタート。

(『八重山写真貼 下巻』〈石垣市、2001年〉より転載)

西表島の歌謡便覧

本稿は、西表島の歌謡の検索の便を図ることと、校異（諸本で用いられる語句、文字について異同の比較）に資することを目的とする。『竹富町史 第八巻 西表島』の編集にあたり、西表島の歌謡に関する文献資料を収集したが、ここでは次に挙げる基本的な八つのテキストを解題し、これらにおける西表西表島の歌謡に島の歌謡（曲名）の収録頁、その他の基礎的な掲載情報を整理して作表することにする。

原則として、目次と本文のタイトルに異同がある場合、「備考」欄に異同を示し、「曲名」欄には記述が分かりやすいもの（ルビが振ってあったり、情報量の多い方）を採用して記すことにする。なお歌番号、地域名が示されているものは欄を設け、テキストにしたがって記した。

- 1 喜舎場永珣『八重山民謡誌』（沖縄タイムス社、1967年）
- 2 喜舎場永珣『八重山古謡』（下巻）（沖縄タイムス社、1970年）
- 3 『竹富町誌』（竹富町、1974年）
- 4 外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成 IV 八重山篇』（角川書店、1979年）
- 5 『日本民謡大観（沖縄奄美）』（八重山諸島篇）（日本放送出版協会、1989年）
- 6 石垣金星『西表民謡誌と工工四』（西表をほりおこす会、2006年）
- 7 『西表島の民謡』（特定非営利活動法人 西表島エコツーリズム協会、2013年）
- 8 『竹富町古謡集』（第1集～第5集）（竹富町教育委員会、1981年～2005年）

1 喜舎場永珣『八重山民謡誌』（沖縄タイムス社、1967年）

『八重山民謡誌』は1924年（大正13）に出版された『八重山島民謡誌』の改訂増補版で、八重山歌謡研究の基本となる文献である。序論部と本文部から成る構成で、解説、注記ともに充実している。なお、序論部には「八重山民謡の史的考察」が収められている。

凡例には「本書は故大浜用能翁並に喜舎場永整氏の八重山歌集を参考として研究した」とあるように、節歌の注釈が中心で、104曲が収録されている。このうち西表島の歌謡は20曲収録。

歌詞の表記については、宮良當壯氏の方言研究の成果を反映し、漢字、ひらがな、カタカナを混ぜつつ独自の表記法をつくりあげている。歌詞には対訳が付されている。

著者・喜舎場永珣氏（1885－1972）は「八重山学の父」と称され、生涯にわたって八重山の歴史、民俗、歌謡などを研究した。喜舎場氏は1905年（明治38）から1932年（昭和7）の教師生活のうち、1914年（大正3）には西表小学校に第6代校長として1年間赴任している。その間の体験したことや調査状況などが、西表島の歌謡に関する解説のなかにもうかがうことができる。

ところで、同氏によって収集された公文書類、また各地で行った調査ノートなどが、2012年（平成24）に遺族から石垣市立八重山博物館に「喜舎場家文書」（2938点）として寄贈された。その後、「喜舎場永珣調査会」により目録が作成され、それが『喜舎場永珣資料調査報告書』（石垣市教育委員会、2018年）に収録されている。これらの資料は喜舎場の著作にどれぐらい反映されているのだろうか。ここでは参考として、主に「目録1 文書史料」、「目録3 調査ノート」から、西表島に関連すると思われるものを拾うことにした。

「目録1 文書史料」には、No.67「八重山島由来記・慶来慶田城由来之事・八重山島大阿母役目官位由来こいにや・悪鬼納嘉那志へ貢納船造立候時あやご・八重山島記帳」、No.70「八重山島由来記・

慶来慶田城由来記・八重山島年来記」、No.89「〔錦芳氏系図家譜小宗〕」、No.111「西表村詰員衆所望米及諸物品代金受拂帳 明治廿三年」、No.126「諸綴〔廃藩置県前ノ教育（西表校）〕」などがある。

「目録3 調査ノート」には、No.22「西表研究 大正11年1月」、No.48「みゆすくぬ島 古見 昭和六年八月」、No.65「けらい慶田城由来記 一1933.5.30再記」、No.68「西表島開拓ノ方策（抜萃）1934（昭和9年）12月調査」、No.73「島の薫り 昭和11年若夏」、No.117「八重山ゆんぐとう集 1960.1 昭和35年」、No.127「くんま一民俗 II 1962.3月」、No.137「八重山史と民俗（5）号 1966.1月」、No.153「西表祖納古謡 1968.10」、No.166「あんとり さけ一ま かぬか 土俗」、No.182「西表祖納民謡、神謡、童謡、民俗、寿詞、俚諺、年中行事」、No.191「八重山民謡集」などがある。

〈表1〉『八重山民謡誌』にみる西表島の歌謡

曲名	地域	頁	備考
古見の浦節	古見	292	
^{アギ} 揚古見の浦節	古見	299	目次は「揚古見の浦節」。
^{ハシユ} 橋世バ節	古見	300	目次は「橋世バ節」。
ヤクジャーマ節	古見	304	
ザンザプロウ節	高那	310	一名《高那節》。
^{ウイバル シマ} 上原ヌ島節	上原	316	目次は「上原ヌ島節」。
デンサ節	上原	319	
祖納岳節	祖納	337	
^{ナカラダー} 仲良田節	祖納	341	目次は「仲良田節」。
殿様節	祖納	344	
^{ソンプレー} 下原節	祖納	352	目次は「下原節」。
マルマブンサン節	祖納	359	
マンカ節	祖納	362	
^{ニサイ} 二オトウラ節	—	366	地域名は記されていない。目次は「二オトウラ節」。
ゾシィケマ節	祖納	368	
石ヌ屏風節	船浮	378	
^{ウハラクイチィ} 大原越地節	西表	380	《チィラシ》も収録。目次は「大原越地節」。
^{ミナト} 湊節	崎山	384	目次は「湊節」。
崎山節	崎山	387	
^{タキ} ウリチィ岳節	網取	395	

2 『八重山古謡』〈下巻〉（沖縄タイムス社、1970年）

喜舎場永珣氏による長年の調査により収集された諸ジャンルの古謡が230余編収録されている。歌詞の表記は漢字、カタカナ混じりである。各歌謡には訳文が付され、語注・語釈に加え、その背景となる八重山の歴史、社会、民俗など、豊富な知識を提供してくれる。ちなみに、1971年度日本民俗学会「柳田国男賞」が授与されている。

本書は『『八重山民謡誌』の姉妹編』であり、〈上巻〉と〈下巻〉で成り立つが、〈上巻〉には石垣

島の古謡、〈下巻〉には離島の古謡が収録されている。

そのうち、西表島の古謡は〈下巻〉に38曲が収録されている。このなかには「狂言」も含まれている。

〈表2〉『八重山古謡』〈下巻〉にみる西表島の歌謡

曲名	地域	頁	備考
<small>フナク</small> 船漕ギユンタ	古見	437	目次は「船漕ギユンタ」。
赤マタユンタ	古見	447	
<small>ヤー</small> (一)家タカビ	祖納	450	ヤータカビの歌謡。目次は(一)(二)を一括して「家タカビ」としている。
(二)家タカビ	祖納	453	ヤータカビの歌謡。
(三)アーパーレー	祖納	458	ヤータカビの歌謡。
(四)マチィンガニジラバ	祖納	462	「(前述したので割愛)」とある。ヤータカビの歌謡。
<small>イニ タニ</small> 稲ガ種子アヨウ	祖納	462	目次は「稲ガ種子アヨウ」。
<small>マイミキ</small> 米神酒ヌアヨウ	祖納	467	目次は「米神酒ヌアヨウ」。
<small>マイミキ</small> 米神酒シャーヌアヨウ	祖納	471	目次は「米神酒シャーヌアヨウ」。
米ノラバヌユングドゥ	祖納	475	
<small>カアー</small> <small>アフターマユングドゥ</small> 井戸ヌパタヌ小蛙誦言	祖納	478	目次は「井戸ヌパタヌ小蛙誦言」。
バガ島ユングドゥ	祖納	481	
<small>ムル ウヤカタ</small> <small>ユングドゥ</small> 岡ヌ親方誦言	祖納	486	目次は「岡ヌ親方誦言」。
<small>ユングドゥ</small> 大野ガヤ誦言	祖納	486	目次は「大野ガヤ誦言」。
<small>タウ</small> 田植ビジラー	祖納	494	目次は「田植ビジラー」。
バナリミジュユングドゥ	祖納	498	
種子取口説	祖納	505	
山ジラー	祖納	507	
(1)船アンガマ踊り	祖納	517	「節祭に関する記録と古謡」。
(2)ピョーシ (拍子)	祖納	518	「船子ノ權躍り」とある。「節祭に関する記録と古謡」。
(3)船乗祈願歌	祖納	520	「節祭に関する記録と古謡」。
(4)弥勒節 〈其の一〉	祖納	521	「婦女子が謡う」、「集合所から船元に到る間に謡う」とある。「節祭に関する記録と古謡」。
弥勒節 〈其の二〉	祖納	523	「船元から戻る時謡う」とある。「節祭に関する記録と古謡」。
弥勒節 〈其の三〉	祖納	524	「長下屋から戻る歌」とある。「節祭に関する記録と古謡」。
(5)与那覇節	祖納	524	「節祭に関する記録と古謡」。「磨踊り」とある。
(6)ヤラヨウ節	祖納	525	「節祭に関する記録と古謡」。
<small>ウヒラカー</small> (7)太平井ヌ歌	祖納	525	「節祭に関する記録と古謡」。目次は「太平井ヌ歌」。
<small>テサジ</small> (8)五尺手巾	祖納	527	「アンガマ踊り」とある。「節祭に関する記録と古謡」。
(9)ルーポー	祖納	529	「狂言」とある。「節祭に関する記録と古謡」。
(10)リッポー	祖納	532	「狂言、牛狂言ともいう」とある。「節祭に関する記録と古謡」。
(11)吉報	祖納	533	「狂言」とある。「節祭に関する記録と古謡」。
(12)節祭りの時の御前風	祖納	535	「節祭に関する記録と古謡」。
(13)ヤーラヨイ	祖納	536	「豊年祭の時座敷で氏子全員で謡う」。「節祭に関する記録と古謡」とある。豊年祭の歌謡。目次に曲名なし。

アーパレ	祖納	540	「豊年祭の時に謡う」とある。豊年祭の歌謡。
マイ トゥ 前ヌ渡ジラバ	網取	543	目次は「前ヌ渡ジラバ」。
アントゥリイ 網取ユングドゥ	網取	543	目次は「網取ユングドゥ」。
崎山ユンタ	崎山	550	
今日ガ日ジラバ	崎山	558	

3 『竹富町誌』（竹富町、1974年）

総合的な観点に基づいて編まれた竹富町初の「町誌」。内容は、第1章「総論」に始まり、「行政」「議決機関」「財政」「産業経済」「竹富町農業共同組合」「土木・建設」「運輸・通信」「教育・文化」「保険衛生」「福祉」「治安」「風俗習慣」「社寺・宗教」「名所旧跡」「口碑・伝説」「歌謡」「人物伝」「旧家と遺物」「碑石文」「各島の略誌」「大東亜戦争と町民」の22章に分けられる。巻末には「竹富町年表」と「付録」が収められている。

歌謡は、第17章「歌謡」には94曲が収録され、各歌に伝承地域が示されている。第1節「民謡」には竹富町の島々に由来する節歌を中心に50曲、第2節「古謡」には、アヨー、ユンタ、ジラバ、ユングトゥなどの諸ジャンルの古謡が45曲、第3節「童謡」には21曲の童謡が収録されている。第1節では各歌謡に「大意」が記され、歌詞は漢字、カタカナ混じりの表記である。

収録された計116曲のうち、西表島の歌謡は42曲（民謡21曲、古謡17曲、童謡4曲）を拾うことができる。

〈表3〉『竹富町誌』にみる西表島の歌謡

ジャンル	曲名	地域	頁数	備考
民謡	古見の浦節	古見	273	
民謡	揚古見の浦節	古見	274	
民謡	橋世バ節	古見	274	
民謡	ヤクジャーマ節	古見	275	
民謡	西表口説	西表	277	
民謡	租納岳節	西表	278	
民謡	仲良田節	西表	278	
民謡	下原節	西表	279	一名「ソンバレー節」。
民謡	マルマブンサン節	西表	280	
民謡	マンカ節	西表	281	
民謡	二オトウラ節	西表	282	
民謡	ゾシケマ節	西表	282	
民謡	殿様節	船浮	283	
民謡	石ヌ屏風節	船浮	285	
民謡	ウリチ岳節	網取	286	
民謡	崎山節	崎山	286	
民謡	湊節	崎山	287	
民謡	大原越地節	鹿川	288	
民謡	上原ヌ島節	上原	288	

民謡	デンサ節	上原	289	
古謡	船漕ギユンタ	古見	300	
古謡	赤マタユンタ	古見	300	
古謡	ヤ 家タカビ歌(1)	西表	302	
古謡	家タカビ歌(2)	西表	303	
古謡	アーパレー	西表	303	
古謡	マチンガニヂラマ	西表	304	
古謡	イニ タニ 稲ガ種子アヨウ	西表	304	
古謡	マイミキ 米神酒ヌアヨウ	西表	305	
古謡	米神酒シヤーヌアヨウ	西表	305	
古謡	マイ 米ノラバユングト	西表	305	
古謡	カア バタサアブターマ 井戸ヌ端ヌ小蛙ユングト	西表	306	
古謡	バガ島ユングト	西表	307	
古謡	ムル 岡ヌ親方ユングト	西表	307	
古謡	ウフヌ 大野ガヤユングト	西表	308	
古謡	パナリミジユングト	西表	308	
古謡	タウビ 田植ジラー	西表	309	
古謡	山ジラー	西表	309	
童謡	チキンチコーマ (お月さま)	西表	314	
童謡	ナーフナヨ (泣くなよ)	西表	314	
童謡	ホイヤヨラシヨッカ	西表	314	「あやす」とき。
童謡	ヨウヒオリヨ	西表	315	「おねんね」のとき。

4 『南島歌謡大成 IV 八重山篇』(角川書店、1979年)

『南島歌謡大成』全5巻は、奄美諸島から八重山諸島にいたる、南島におけるすべての歌謡を網羅し、ジャンル別に集大成している。これらは南島歌謡研究のための基礎的文献となり、本書はその「八重山篇」で八重山歌謡1051篇が収録されている。歌詞はひらがな、囃子詞はカタカナ表記とし、下段には逐語訳が施されている。その他、「八重山の歌謡」(外間守善)、「八重山歌謡研究史概観」(宮良安彦)、「出典文献解題」などの解説・論考が、本書活用の良き手引きとなっている。

西表島歌謡のジャンル別の収録曲数は、「ニガイフチィ」3編、「ヤータカビ」1曲、「ユングトウ」7曲、「アヨー」6曲、「ジラバ」6曲、「ユンタ」12曲、「節歌」1曲、「口説歌謡」2曲、「雨乞いの歌③アマグイ」1曲、「豊年祭の歌」3曲、「節祭の歌」7曲である。それぞれの歌謡には地域名が付されている。

これらの歌謡の検索の便を図るため、「歌番号」、「曲名」、「地域」、「ページ」、「備考」の欄を設けた表を作成した。

〈表4〉『南島歌謡大成 IV 八重山篇』にみる西表島の歌謡

歌番号	曲名	地域	頁数	備考(出典など)
ニガイフチィ64	くしもり御嶽の神司の崇び	西表島祖納村	58	『八重山古謡』〈下〉
ニガイフチィ65	家浄めの祝詞	西表島祖納村	58	「八重山地方の獅子舞と獅子祭の祝詞について」『まつり』〈17号〉
ニガイフチィ66	節祭の時の願い口	西表島祖納村	58	宮良安彦採録
ヤータカビ4	あーばーれー	西表島祖納村	110	『八重山古謡』〈下〉
ユングトゥ34	米のらばぬゆんぐどう	西表島祖納村	136	『八重山古謡』〈下〉
ユングトゥ35	井戸ぬばたぬ小蛙誦言	西表島祖納村	136	『八重山古謡』〈下〉
ユングトゥ36	ばが島ゆんぐどう	西表島祖納村	137	『八重山古謡』〈下〉
ユングトゥ37	岡ぬ親方誦言	西表島祖納村	137	『八重山古謡』〈下〉
ユングトゥ38	大野がや誦言	西表島祖納村	137	『八重山古謡』〈下〉
ユングトゥ39	ばなりみじゆゆんぐどう	西表島祖納村	138	『八重山古謡』〈下〉
ユングトゥ40	網取ゆんぐどう	西表島祖納村	139	『八重山古謡』〈下〉
アヨー26	角皿のあよう	西表島祖納村	166	『南島覚書』
アヨー27	真乙姥のあよう	西表島祖納村	166	『南島覚書』
アヨー28	中皿のあよう	西表島祖納村	166	『南島覚書』
アヨー29	稲が種子あよう	西表島祖納村	167	『八重山古謡』〈下〉
アヨー30	米神酒ぬあよう	西表島祖納村	167	『八重山古謡』〈下〉
アヨー31	米神酒しやーぬあよう	西表島祖納村	168	『八重山古謡』〈下〉
ジラバ64	家たかびのじらば〈その一〉	西表島祖納村	239	『沖縄音楽総攬』
ジラバ65	家たかびのじらば〈その二〉	西表島祖納村	239	『沖縄音楽総攬』
ジラバ66	田植びじらー	西表島祖納村	240	『八重山古謡』〈下〉
ジラバ67	山じらー	西表島祖納村	241	『八重山古謡』〈下〉
ジラバ68	前ぬ渡じらば	西表島網取村	241	『八重山古謡』〈下〉
ジラバ69	今日が日じらば	西表島崎山村	242	『八重山古謡』〈下〉
ユンタ141	崎山ゆんた	西表島崎山村	395	『八重山古謡』〈下〉
ユンタ142	豊年祭祈願の神歌 (1) 船を漕ぎつゝ謡う歌 (2) 赤またー白またーの各戸を訪れる時の神歌	西表島古見村	397	『南島』〈第1輯〉
ユンタ143	とぅにむとう家でのあかまたー歌	西表島古見村	397	『八重山古謡』〈下〉
ユンタ144	あかまたゆんた	西表島古見村	397	「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』
ユンタ145	古見邑ゆんた	西表島古見村	397	「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』
ユンタ146	船漕ゆんた (1) 本御嶽に対する歌 (2) 子御嶽に対する歌 (3) あか(しろ)じゃーまに対する歌	西表島古見村	398	「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』

ユンタ147	爬竜船競技がおこなわれ、それが終わったあと舟たちは御嶽へ行く。その時の歌	西表島古見村	399	「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』
ユンタ148	通のゆんた	西表島古見村	399	「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』
ユンタ149	出入のゆんた	西表島古見村	400	「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』
ユンタ150	うむとう離りぬゆんた	西表島古見村	400	「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』
ユンタ151	ままりぬゆんた	西表島古見村	401	「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』
ユンタ152	掛け合いのゆんた	西表島古見村	401	「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』
節歌15	うりちい岳節	西表島網取村	509	『八重山民謡誌』
口説歌謡 5	種子取口説	西表島祖納村	546	『八重山古謡』〈下〉
口説歌謡 6	西表口説	西表島祖納村	547	『竹富町誌』
雨乞いの歌③アマグイ 8	雨乞い歌	西表島古見村	582	『八重山小話』
豊年祭の歌 9	あーぱーれ	西表島祖納村	598	『八重山古謡』〈下〉
豊年祭の歌10	あぱれ	西表島祖納村	598	『南島覚書』
豊年祭の歌11	座たかべ（座かざり）	西表島祖納村	598	『南島覚書』
節祭の歌 1	〔西表節祭舟漕ぎの時の〕 神歌	西表島	609	『南島』〈第1輯〉
節祭の歌 2	ぴようし	西表島	609	『南島』〈第1輯〉
節祭の歌 3	舟乗りの歌	西表島	609	『南島』〈第1輯〉
節祭の歌 4	御前風	西表島	609	『南島』〈第1輯〉
節祭の歌 5	ぐさく手	西表島	610	『南島』〈第1輯〉
節祭の歌 6	〔あんがま踊の歌・第三歌謡〕	西表島	610	『南島』〈第1輯〉
節祭の歌 7	出船の歌	西表島	610	『南島』〈第1輯〉

5 『日本民謡大観(沖縄奄美)』〈八重山諸島篇〉(日本放送出版協会、1989年)

『日本民謡大観(沖縄奄美)』は、日本放送協会(NHK)が全国各地の民謡を9年にわたり編集した『日本民謡大観』全9巻の続編全4巻で、本書はそのうちの「八重山諸島篇」である。

本書は、収録された387曲の八重山歌謡が社会生活のなかでどのような場面でうたわれているかを基準として分類されており、ほとんどの歌謡に楽譜が付されている。楽譜については、実際の演唱をもとに作譜されているが、その記録日時や演唱者名が記されており貴重な情報となっている。ちなみに、西表島の歌謡はすべて1970年代の記録にもとづいている。また、歌詞と旋律からなる歌謡を文学的側面と音楽的側面から記録したところに本書の特色がある。

歌謡の分類は大きく「Ⅰ 子どもとの関わり」、「Ⅱ 儀礼・行事・祝い」、「Ⅲ 仕事・作業」、「Ⅳ 座興・遊び」と四つの大項目に分けて編集されている。本書に収録された西表島の歌謡49曲を四つの分類にあてはめて表したのが次の表である。祭祀における奉納舞踊の伴奏音楽である節歌は「Ⅳ 座興・遊び」に分類されている。

曲名は、漢字かなまじり表記、読み方、ローマ字表記の3通りが示されている。例えば、82《蓋策っ子》には「ふたんでいるま」、「futadiruma」、204《判付け祝いの歌》には「ばんちきゆわいのうた」 「panchikiyuwaino-uta」、285《南さくだのユンタ》には「ばいさくだぬゆんた」、「paisakuda-yunta」が曲名に付されている。ここでは漢字かなまじり表記のみを示すことにする。そのとき、方言が語源的に対応するものについて、漢字をあてていることを断っている。

歌詞はひらがなで記し、そのなかの囃子詞、掛け声、産み字などはカタカナ書きである。歌詞には逐語訳が付されている。

〈表5〉『日本民謡大観（沖縄奄美）』〈八重山諸島篇〉にみる西表島の歌謡

大項目（場面）		ジャンル	番号・《歌謡名》・（頁数）	地域（演唱者）
I 子どものかかわり	わらべうた	子どもの遊び歌		
	子守歌	子守歌、遊ばせ歌	31 《東から》 (61)	古見（新本オナリ）
共同体行事歌	神事に関わる歌	雨乞い歌	48 《雨乞いユンタ》 (81)	古見（新本オナリ）
		ミシャグパーシ		
	行事歌	ユングトウ	80 《我がうん田の米》 (121)	古見（大底朝要）
			81 《かざふきゃ》 (122)	古見（大底朝要）
			82 《蓋策っ子》 (122)	古見（次呂久弘起）
			83 《家戸の棧の》 (123)	古見（新本トミ）
			84 《一人ある女の子》 (124)	古見（新本トミ）
			85 《岡の親方ユングトウ》 (125)	祖納（那根武）
			86 《大野茅ユングトウ》 (126)	祖納（那根武）
			87 《川原の端の小蛙ユングトウ》 (128)	祖納（那根武）
			88 《米稔らばのユングトウ》 (129)	祖納（那根武）
			89 《米稔らばのユングトウ》 (130)	船浮（戸真伊亀吉）
			90 《魚のユングトウ》 (131)	船浮（戸真伊亀吉）
	91 《牛のユングトウ》 (132)	船浮（戸真伊亀吉）		
	アヨー	125 《稲が種子アヨー》 (176)	星立（慶田盛寛松）	
		126 《米神酒しゃーのアヨー》 (178)	祖納（那根武）	
		127 《米神酒のアヨー》 (179)	祖納（那根弘）	
		128 《米神酒アヨー》 (180)	船浮（井上文吉）	
		129 《みだしアヨー》 (182)	船浮（井上文吉）	
	ジラバ・ユンタ			
豊年祭の歌	162 《アーパーレー》 (222)	祖納（玉代勢スミ）		
	163 《ヤーラーヨーイ》 (223)	祖納（玉代勢スミ）		
節祭の歌	172 《星立のトゥバラーマ》 (232)	星立（浦内サダ）		
	173 《今日の誇らしゃ》 (233)	祖納（那根フジ、那根文）		
	174 《与那覇節》 (234)	祖納（那根フジ、那根文）		
	175 《くみぬ鳥》 (235)	船浮（井上文吉）		
	176 《五尺手》 (237)	船浮（井上文吉）		

			177 《船ハイ》 (238)	船浮 (井上文吉)
		種子取祭の歌	196 《あんがりちゃ》 (264)	古見 (新本定男)
		その他の行事歌	204 《判着け祝いの唄》 (274)	祖納 (那根武)
	家行事歌	念仏	207 《無蔵念仏》 (285)	星立 (冨間正二郎、石垣金星、新城寛好)
		嫁入り歌		
		家タカビ	215 《家造りのユンタ》 (303) 216 《家崇び》 (304)	古見 (次呂久弘起、大底朝要) 星立 (慶田盛宙士、慶田盛寛松)
Ⅲ 仕事・作業	作業歌	ジラバ・ユンタ	284 《石垣船》 (421) 285 《南さくだのユンタ》 (423) 286 《南さく一だのジラバ》 (424) 287 《田植えージラー①》 (425) 288 《田植えージラー②》 (427) 289 《一人子のジラー》 (428)	古見 (仲本芳雄) 古見 (新本オナリ) 古見 (新本オナリ) 祖納 (那根武、那根弘) 祖納 (那根武、那根弘) 祖納 (新盛行雄)
Ⅳ 座興・遊び	座興歌・遊び歌	節歌	338 《橋ゆば節》 (544) 339 《揚古見の浦節》 (546) 340 《やぐじゃーま節》 (549) 341 《デンサー節》 (550) 342 《石の屏風節》 (552) 343 《祖納嵩節》 (555) 344 《下原節》 (557) 345 《仲良田節》 (560) 346 《真山節 (まんか節)》 (563) 347 《まるま盆山節》 (565) 348 《殿様節》 (566)	古見 (大底朝要) 古見 (大底朝要) 古見 (大底朝要) 上原 (友利実) 祖納 (新盛行雄) 祖納 (山城孫勇、宮良全勇) 祖納 (新盛行雄) 祖納 (那根武) 祖納 (新盛行雄) 祖納 (新盛行雄) 船浮 (戸真伊亀吉)
		トゥバラマ		
		スンカニ		
		口説		
	古典歌謡			
	新民謡・流行歌			

6 石垣金星『西表民謡誌と工工四』(西表をほりおこす会、2006年)164頁。

『西表民謡誌と工工四』は、「はじめに」「西表の歴史と文化」「歌詞と工工四」の三本柱から成っている。西表島西部を中心に全26曲収録(そのうち狂言も含む)されているが、各歌謡は基本的に歌詞、工工四、解説で構成されている。これらの記述には伝承者や、島で暮らす者にしか知りえない具体的な情報が記されており貴重である。

とりわけ、歌詞や諸情報の記録のみならず、工工四(楽譜)が付されている点から、実用的な側面においても注目できる。《祖霊念仏》の工工四譜内には「×」を入れて太鼓とソク(鉦)を表わす

工夫がみられる。

歌謡は地域ごとに編集されており、「祖納の民謡」には12曲と狂言「品取り狂言」1曲、「千立の民謡」には4曲と狂言「うじら狂言」1曲、「浦内の民謡」には1曲、「上原の民謡」には1曲、「舟浮の民謡」には1曲、「網取の民謡」には2曲、「崎山の民謡」3曲が収録されている。

これらは「1970年以来、西表民謡愛好会と愛好会顧問であった新盛行雄さん（故・当時70歳）の唄をテープに録音しそれを書き起こしたものです。／網取、崎山の歌については『我が島アントゥリ』山田武男述／安溪游地・安溪貴子編、『崎山節の故郷』川平永美述／安溪游地・安溪貴子編を引用したものです」と出所を明示している。特に網取・崎山の歌謡については、「同じ西表島にありながら、網取と崎山は海により隔てられて舟で行かねばならないなど、西表島の多くの村々の中で陸の孤島として厳しい環境にあります。そのような自然環境の違い等により文化の伝承にどのような違いがあるのかなど比較してみることも大いに意味のある事から掲載しました」（「はじめに」）とも述べている。

著者・石垣金星氏（1946年生）は沖縄本島で教職に就いていたが、1972年（昭和47）の帰郷の際、学生時代から弾いていたギターを三線へ持ち替え、父親から民謡を学んだ。また、当時活動していた「西表民謡愛好会」（当時の会長・那根弘、副会長・山城孫勇）に参加し、先輩方に交じって稽古したという。ちなみに、「西表民謡愛好会は、昭和32年頃に那根弘さん、山城孫勇さんが中心となり西表民謡を保存伝承する目的として発足した団体」（「はじめに」）である。

〈表6〉『西表民謡誌と工工四』にみる西表島の歌謡

	曲名	地域	頁	備考
1	スナイダキ 祖納嶽節	祖納	23	工工四は22頁に収録。目次は「祖納嶽節」。
2	イリムティクトッキ 西表口説	祖納	26	工工四は25頁に収録。目次は「西表口説」。
3	イリムティ 西表はやし口説	祖納	28	目次は「西表はやし口説」。
4	まるまぼんさん節	祖納	30	工工四は29頁に収録。
5	ナカラダ 仲良田節	祖納	35	工工四は34頁に収録。目次は「仲良田節」。
6	スンバレ 下原節	祖納	43	工工四は38－42頁に収録。目次は「下原節」。
7	まんか節	祖納	48	工工四は47頁に収録。一名《真山加那ぶぎ》。
8	トゥッサマ 殿様節	祖納	53	工工四は51・52頁に収録。51頁は本調子、「ゆっくりした調子」。52頁は「二揚調子・早弾」。目次は「殿様節」。
9	ゾシケマ節	祖納	60	「殿様節の曲で歌う」。「成屋」とある。目次は「ぞしけま節」。
10	ナリヤ 成屋ゾシケマ節	祖納	66	「殿様節の曲で歌う」。目次は「成屋ぞしけま節」。
11	ニサイ 二才トウラ節	祖納	69	「マンカ節の曲で歌う」。目次は「二才とうら節」。
12	ソールニンプチ 祖霊念仏節	祖納	73	工工四は71頁に収録。72頁には工工四で《道行きの三線》を収録。目次は「祖霊念仏節」。
13	しなどうりきよんぎん 品取り狂言	祖納	79	狂言。工工四は78頁に収録。目次は「品取り狂言」。
14	フシクティ 千立ぬトウバイラマ節	千立	89	工工四は88頁に収録。目次は「千立ぬトウバイラマ」。
15	フタデクトッキ 千立口説	千立	91	工工四は90頁に収録。目次は「千立口説」。
16	ナカラダ 仲良田節	千立	97	工工四は96頁に収録。目次は「仲良田節」。
17	ソールニンプチ 祖霊念仏節	千立	100	工工四は98、99頁に収録。98頁には《祖霊念仏節》、99頁には《祖霊念仏節》の「十三番終わりの句」、《道行きの三線》を収録。目次は「祖霊念仏節」。

18	ウジラ狂言	千立	103	狂言。工工四は102頁に収録。目次は「うじら狂言」。
19	ンゲマ	浦内	106	工工四は105頁に収録。目次は「んげま」。
20	ディンサー節	上原	110	工工四は109頁に収録。
21	イシ ビョウブ 石ぬ屏風節	舟浮	125	工工四は123-124頁に収録。目次は「石ぬ屏風節」。
22	ウルチ岳節	網取	128	工工四は127頁に収録。130頁に「祖納に伝承されている歌詞」を収録。
23	ウファラクイチ 御原越地節	網取	136	工工四は134-135頁に収録。136頁に「祖納に伝承されている歌詞」、137頁に「網取に伝承されている歌詞」を収録。目次は「御原越地節」。
24	サキヤマ 崎山ユンタ	崎山	142	工工四は141頁に収録。142-143頁に「祖納に伝承されている歌詞」、144-145頁に「崎山に伝承される歌詞」を収録。
25	サキヤマ 崎山節	崎山	148	工工四は146（本調子）、147頁（二揚調子）に収録。148-149頁に「祖納に伝承されている歌詞」、150-151頁に「崎山に伝承されている歌詞」を収録。
26	ミナトッブシ 湊節	崎山	156	工工四は155頁に収録。156-157頁に「祖納に伝承されている歌詞」、158-159頁に「崎山に伝承されている歌詞」を収録。目次は「湊節」。

7 『西表島の民謡』（特定非営利活動法人 西表島エコツーリズム協会、2013年）

2012年（平成24）、西表島エコツーリズム協会が文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業の助成を受け、「西表島民謡ガイド養成講座」を開催したときに作成したのが本書『西表島の民謡』である。監修は石垣金星氏（西表民謡愛好会会長）、平良彰健氏（八重山古典音楽安室流協和会教師）で、池田米蔵氏、新盛基代氏、通事健次氏の協力によるもの。

「単なる『歌い手』ではなく『ガイド・解説者』の育成」を目的として作成されたものだけに、実際に西表島の代表的な歌の発祥の地に立ち、背景となる歴史に思いをはせながら学ぶのに適したテキストといえる。

歌詞には逐語訳、解説が施されている。また、西表島で伝承されている歌詞と、八重山一般でうたわれている歌詞が併せて収録されており、両者の比較ができるような工夫が凝らされている。なお〈表7〉において、No.15《鳩間節》、No.16《鳩間千鳥節》は割愛したことを断っておく。

〈表7〉『西表島の民謡』にみる西表島の歌謡

No.	曲名	地域	頁数	八重山で一般的な曲名	地域	頁数
1	くんのーら 古見ぬ浦節	古見	2	—	—	—
2	ヤクジャーマ節	古見	4	やぐじゃーま節	八重山一般	5
3	はしゆ 缸世ば節	古見	6	はし 缸ゆば節	八重山一般	7
4	—	—	—	たかな 高那節	八重山一般	8
5	でいんさー節	祖納	10	でんさ節	八重山一般	11
6	—	—	—	ういばる すま 上原ぬ島節	八重山一般	12
7	まるまぼんさん節	祖納	13	—	—	—

8	すないだき 祖納嶽節	祖納	14	—	—	—
9	すんばれ 下原節	祖納	15	—	—	—
10	なからだ 仲良田節	祖納	16	—	—	—
11	いし びょうぶ 石ぬ屏風節	舟浮	17	—	—	—
12	とうぬさま 殿様節	祖納	18	—	—	—
13	さきやま 崎山節	崎山	20	—	—	—
14	うふあらくいち 御原越地節	網取	22	うふあらくいつい 大浦越路節	八重山一般	23

8 『竹富町古謡集』（竹富町教育委員会、1981～2005年）

竹富町教育委員会から発刊した一連の古謡集で、全5集（以下、各々〈第1集〉、〈第2集〉、〈第3集〉、〈第4集〉、〈第5集〉と略記することにする）の刊行を25年の歳月をかけて完結させた。「本集所載の歌謡は竹富町文化財保護審議会の収録した資料を基に地域担当の編集委員が、それぞれの島の関係者をたずね補筆を施したものである」。

「凡例」に「歌謡の配列は、地域別に分類しジャンル別に並べた」とある。歌詞には逐語訳が施され、「解説」は歌謡の内容理解を助けるものである。歌詞の表記は、石垣繁氏の「新八重山仮名一覧表」を原則としている。

（1）『竹富町古謡集』（第1集）（竹富町教育委員会、1981年）

『竹富町古謡集』（第1集）編集委員長は西表島祖納村出身の那根弘氏。西表島の担当者について、古見村は石垣繁氏、干立村は玉津博克氏、祖納村は石垣久雄氏である。

那根弘氏は巻頭で「古謡を知っておられる老君たちが健在であられるこの時機に、古謡をより正確にまとめておくべきだとの声が高まり、古謡集の編集に手がけた次第であります。島や村が多く、そ

〈表8-1〉『竹富町古謡集』（第1集）にみる西表島の歌謡

タイトル	地域	頁
いに たに 稲が種子あよー（ゆいぬかざりキ）	古見村	161
道あよー（あんがりちゃ）	古見村	169
ぶなれーまゆんた	古見村	175
ぶなれーまじらま	古見村	188
いにがたにあよー	干立村	197
かーぬばたつあぬあぶたまゆんぐとう	干立村	205
いに たに 稲が種子あよー	祖納村	213
まいみき 米神酒ぬあよー	祖納村	223
まいみき 米神酒しゃぬあよー	祖納村	229
たうび 田植じらー	祖納村	231
まい 米のらばぬゆんぐとう	祖納村	236

それぞれことばが違う竹富町の古謡を一つにまとめて編集する中で有意義に感ずることは、一本の糸のようにつながった共通のものがある反面、島独自の特色がはっきり表われているところでもあります」（「編集にあたって」と述べている。

〈第1集〉には、9地域41曲が収録されている。内訳は「竹富島」（6曲）、「黒島」（4曲）、「小浜島」（5曲）、「新城島」（4曲）、「鳩間島」（2曲）、「古見村」（4曲）、「干立村」（2曲）、「祖納村」（5曲）、「波照間島」（9曲）である。

(2) 『竹富町古謡集』〈第2集〉(竹富町教育委員会、1997年)

〈表8-2〉『竹富町古謡集』〈第2集〉にみる西表島の歌謡

曲名	地域	頁
ぴーとうりゃーある みどうぬふあー	古見村	213
^{かあ} 井戸ぬばたっつあぬあぶたま・ゆんぐとう	租納村	225
^{やま} 山じらー	租納村	227
たうび・じらー (きゆがびぬ・じらー)	租納村	233
^や 家たかび (一)	租納村	240
^や 家たかび (二)	租納村	245
あーばれー	租納村	251
^{うぶぬ} 大野がや・ゆんぐとう	租納村	256
ばなりみず・ゆんぐとう	租納村	261
^{いにたに} 稲が種子・あよー	網取村	271
^や 家たかび (一)	網取村	276
^{まいみき} 米神酒ぬ・あよー	網取村	279
^{みーか} 三日・あよー (一)	網取村	282
^{みーか} 三日・あよー (二)	網取村	285
^{みし平} 御神酒あげ謡	網取村	286

『竹富町古謡集』〈第2集〉編集委員長は高嶺方祐氏。西表島の担当者について、古見村は石垣繁氏、租納村・網取村は石垣久雄氏である。その他、委員に宜間正二郎氏がいる。

〈第2集〉には、9地域68曲が収録されている。内訳は「竹富島」(7曲)、「黒島」(7曲)、「小浜島」(10曲)、「新城島」(6曲)、「鳩間島」(17曲)、「古見村」(1曲)、「租納村」(8曲)、「網取村」(6曲)、「波照間島」(6曲)である。

(3) 『竹富町古謡集』〈第3集〉(竹富町教育委員会、2000年)

〈表8-3〉『竹富町古謡集』〈第3集〉にみる西表島の歌謡

曲名	地域	頁
^{あま} 雨・ちんじん	古見村	215
^{たなど} 種取り・あよー	干立村	225
うなざし・ゆんぐとう	干立村	230
ささらにし	干立村	234
ぐごば	干立村	238
ふにぬ・じらば	干立村	240
ふにぬく	干立村	242
^ざ 座たかび	租納村	247
あーばれー	租納村	250
あーばれー	租納村	252
^{むり} ^{うやかた} 岡ぬ親方・ゆんぐとう	租納村	255
^{てい} ヤフぬ手	船浮村	259

『竹富町古謡集』〈第3集〉編集委員長は高嶺方祐氏。西表島の担当者は、古見村は石垣繁氏、租納村・網取村は石垣久雄氏である。その他、委員に宜間正二郎氏がいる。

〈第3集〉には、10地域65曲が収録されている。内訳は「竹富島」(6曲)、「黒島」(9曲)、「小浜島」(7曲)、「新城島」(8曲)、「鳩間島」(8曲)、「古見村」(1曲)、「干立村」(6曲)、「租納村」(4曲)、「船浮村」(10曲)、「波照間島」(6曲)である。

ふなこ ^{うた} 舟漕ぎ歌	船浮村	261
たなど 種子取り・あよー	船浮村	262
ぬばるも一さ (ゆんぐとう狂言)	船浮村	268
いゆ 魚ぬ・ゆんぐとう	船浮村	269
牛ぬ・ゆんぐとう	船浮村	271
むむ 桃ぬ・ゆんぐとう	船浮村	272
まいのー 米稔らばぬ・ゆんぐとう	船浮村	273
まいみき 米神酒・あよー	船浮村	274
みだし・あよー	船浮村	278

(4) 『竹富町古謡集』〈第4集〉(竹富町教育委員会、2002年)

『竹富町古謡集』〈第4集〉編集委員長は石垣繁氏。西表島の担当者について、古見村は石垣繁氏、千立村は大城學氏、祖納村は石垣久雄氏、船浮村・網取村は池田豊吉氏である。その他、委員に西大舛高老氏、宜間正二郎氏がいる。

〈第4集〉では、11地域66曲が収録されている。内訳は「竹富島」(7曲)、「黒島」(10曲)、「小浜島」(7曲)、「新城島」(7曲)、「鳩間島」(4曲)、「古見村」(1曲)、「千立村」(10曲)、「租納村」(9曲)、「船浮村」(6曲)、「網取村」(3曲)、「波照間島」(2曲)である。

〈表8-4〉『竹富町古謡集』〈第4集〉にみる西表島の歌謡

曲名	地域	頁	備考
ふなく 船漕ぎ・ゆんた	古見村	175	目次は「船漕ぎ・ゆんた」
やふぬていー・じらば	千立村	185	
ていんちよーていんばい	千立村	187	
きゆぬふくらしや・じらば	千立村	190	
ぐしゃくていぬぐい・じらば	千立村	192	
ふにくー・じらば	千立村	195	
はやちかい	千立村	197	
かびらはやちかい	千立村	199	
うしういきよんぎん	千立村	202	本文では「うしういきよんぎん」となっている。
みりくぶし	千立村	205	
とうばいらーま	千立村	207	
しま ばが島・ゆんぐとう	祖納村	213	
ましき うすり牧場のうた	祖納村	216	目次は「うすり牧場のうた」。
しちまつ ^{うた} 節祭りの歌 ぴよーし	祖納村	218	目次は「節祭り・ぴよーし」。

みりく ^{ぶし} 節	祖納村	221	目次は「みりく節」。
よなは ^{ぶし} 節	祖納村	224	目次は「よなは節」。
ぐぐば	祖納村	226	
ふね	祖納村	228	
ふなのりきがんのうた	祖納村	231	
きょう ^{ふく} 今日ぬ誇らしや	祖納村	232	目次は「今日の誇らしや」。
くみぬ ^{がらし} 島	船浮村	237	目次は「くみぬ島」。
ぐさく ^{てい} 五尺手	船浮村	238	目次は「五尺手」。
ふに ^{ふに} 船 ハイ	船浮村	240	目次は「舟ハイ」。
あばれ	船浮村	242	
ちぬ ^{ざら} 皿	船浮村	244	目次は「ちぬ皿」。
なか ^{ざら} 中皿	船浮村	246	目次は「中皿」。
やーたか ^{うた} び謡 (二)	網取村	251	目次は「やーたかび謡 (二)」。
やーたか ^{うた} び謡 (三)	網取村	255	目次は「やーたかび謡 (三)」。
なかばしらぬに ^{うた} が ^{うた} い謡	網取村	257	目次は「なかばしらぬにがい謡」。

(5) 『竹富町古謡集』〈第5集〉(竹富町教育委員会、2005年)

『竹富町古謡集』〈第5集〉編集委員長は石垣繁氏。西表島の担当者について、古見村は石垣繁氏、干立村は大城學氏、船浮村・網取村は池田豊吉氏、石垣久雄氏である。その他、委員に西大舩高彦氏、宜間正二郎氏がいる。

(第5集)には、11地域70曲が収録されている。内訳は「竹富島」(9曲)、「黒島」(8曲)、「小浜島」(7曲)、「新城島」(11曲)、「鳩間島」(4曲)、「古見村」(4曲)、「干立村」(4曲)、「祖納村」(4曲)、「船浮村」(3曲)、「網取村」(8曲)、「波照間島」(8曲)である。

〈表8-5〉『竹富町古謡集』〈第5集〉にみる西表島の歌謡

曲名	地域	頁	備考
赤また・ゆんた	古見村	161	本文は「あかまた・ゆんた」。
(1)船を漕ぎつつ謡う神歌	古見村	163	本文は「(1)船を漕ぎつつ謡う歌」。
(2)各戸を訪ねる時の神歌	古見村	164	
(3)とうにむとう家でのあかまた一歌	古見村	165	目次は「(3)とうにむとう家での神歌」。
やーたか ^{やーたか} 家崇び(一)	干立村	169	目次は「家崇び(一)」。
やーたか ^{やーたか} 家崇び(二)	干立村	174	目次は「家崇び(二)」。
あーぱーれ	干立村	178	

あまご 雨乞い・ちじ	千立村	181	目次は「雨乞い・ちじ」。
なかざら 中皿	祖納村	187	目次は「中皿」。
ちぬざら 角皿	祖納村	188	目次は「角皿」。
アパレ	祖納村	189	
ヤラヨー	祖納村	190	
ヤーラーヨー	船浮村	197	
うぶぬがや 大野茅・ユングトゥ	船浮村	199	目次は「大野茅・ユングトゥ」。
かーらぬばたぬあぶたーま 川原の端の小蛙ユングトゥ	船浮村	202	目次は「川原の端の小蛙ユングトゥ」。
みしおいし ^{うた} 謡 (角皿)	網取村	207	目次は「みしおいし謡 (角皿)」。
みしおいし ^{なかざら} (中皿)	網取村	208	目次は「みしおいし (中皿)」。
ヤーラーヨー	網取村	210	目次は「ヤーラーヨー」。
あーばーれー	網取村	212	目次は「あーばーれ」。
〈シチの謡〉きゆぬふくらしゃや	網取村	214	目次は「きゆぬふくらしゃや」。
くくば	網取村	216	
くきくてい 五尺手拭	網取村	217	目次は「五尺手拭」。
ふねー ハイ	網取村	218	

(飯田泰彦)

参考文献

- ・「出典文献解題」(外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成 IV 八重山篇』角川書店、1979年)
- ・三木健『八重山を読む―島々の本の事典―』〈シリーズ 八重山に立つNo.2〉(南山舎、2000年)
- ・石垣市立八重山博物館編『喜舎場永珣資料調査報告書』(石垣市教育委員会、2018年)

西表島干立（星立）に関する資料

(発行年順)

発行年	タイトル	編・著者	出典	発行所
1939	「星立のお祭(写真)」(312頁) 「星立のお産と命名式」(315～318頁)	河村只雄	『南方文化の探求』	創元社
1939	「生きる悲哀」	崎枝泰明	『先島朝日新聞』1939年3月18日	先島朝日新聞社
1950	「干立」(445～446頁)	東恩納寛惇	『南島風土記』－沖繩・奄美大島地名辞典－	沖縄郷土文化研究会
1967	「星立の歌」	黒島寛松	『琉球新報』1967年12月23日	琉球新報社
1968	ふるさとの名所「星立のヤエヤマヤシ群落」(9頁)	在沖繩・西表郷友会	『まるま』(第1号)	在沖繩・西表郷友会
1972	「星立村」(160頁)	牧野 清	『新八重山歴史』	牧野 清
1972	「軍艦岩→稲葉廃村跡→星立」(55～57頁) 「ヤエヤマヤシの里・星立部落」(58～59頁) 「星立のヤエヤマヤシ」(60頁)	琉球大学ワンダーフォーゲル部	『南海の秘境西表島』	琉球大学ワンダーフォーゲル部
1973	「星立部落のお盆のこと」(62～64頁)	渡部静江	『八重山調査報告書－西表・祖納』	早稲田大学アジア学会 第11次八重山調査隊
1974	「9、部落のあだ名○星立フタデガダリア(星立小聲)」(31～33頁) 「28、牝牛石(ウナンイシ)」(136～139頁) 「29、トゥバイリヤーとメオト松」(140～146頁)	那根 亨	『西表島の伝説』	那根 亨
1974	「私の村から～干立の自然と私」	新城敏江	『八重山の自然』	八重山の自然を守る会
1976	「西表星立村のシィチィ(節祭)」(44～61頁)	石垣博孝	『琉大史学』(第8号)	琉球大学史学会
1976	「星立天然保護区域(国指定)」(26頁)	那根 亨	『竹富町の文化財』	竹富町教育委員会
1976	「西表の節祭とアンガマ踊」(1～32頁)	比嘉盛章	『南島』(第1輯)	東京・八重山文化研究会
1977	『西表の方言と民俗』	那根 亨	『西表の方言と民俗』	那根 亨
1977	「ヤフヌ手(星立)」(91頁) 「オホホ(星立)」(91頁)	那根 亨	『竹富町の無形文化財』	竹富町教育委員会
1979	「星立の節祭について」(41～55頁)	那根 武	『西表島祖納星立の節祭(シチの)の芸能』昭和53年度国選択無形民俗文化財記録作成	西表民俗芸能保存会
1980	「六一・節祭の選択書」(211頁)	那根 武	『七〇の坂道』	那根 武
1980	「干立村の創始を思う」(22～25頁) 「干立村雄者ウニファー傳」(25～28頁) 「マヤパタラの幻影」(110～112頁) 「チクイ座の霊石」(112～114頁) 「挽物細工の猿踊り」(191頁) 「彌勒信仰のvari踊り(星立)」(233～234頁)	星 勲	『西表島のむかし話』	ひるぎ社
1980	「(36) 星立部落内遺跡」(36頁)	金武正紀	『竹富町・与那国町の遺跡－詳細分布調査報告書－』(沖縄県文化財調査報告書第29集)	沖縄県教育委員会
1980	「(二)「西表星立部落遺跡 晩期(土器・凹石等)」(78頁)	多和田真淳	『古稀記念 多和田真淳選集(考古・民俗・歴史・工芸篇)』	古稀記念多和田真淳選集刊行会
1980	「36. 星立天然保護区域」(40頁)	沖縄県教育委員会	国・県指定文化財『天然記念物展』	沖縄県教育委員会
1981	「5. 干立村と成屋村」(17～18頁)	星 勲	『西表島の民俗』	友古堂書店

1981	「いたがたにあよー」(197~205頁) 「かーぬばたつあぬあぶたまゆんぐとう」(205~210頁)	玉津博克	『竹富町古謡集』(第一集)	竹富町教育委員会
1981	「4. 干立の御嶽」(234頁)	沖縄県教育委員会	『沖縄県社寺・御嶽林調査報告VI』(沖縄県天然記念物調査シリーズ第21集)	沖縄県教育委員会
1981	「星立天然保護区域」(226頁)	佐久田繁	国・県指定及選択『おきなわ文化財図鑑』	月刊沖縄社
1982	「干立村」「多柄村」「浦内村」(68~74頁)	星 勲	『西表島の村落と方言』	友古堂書店
1983	「星立 ほしたて」(469頁)	牧野 清	『沖縄大百科事典』(下巻)	沖縄タイムス社
1983	「干立御嶽 ほしたてオン」(469頁)	石垣博孝	『沖縄大百科事典』(下巻)	沖縄タイムス社
1983	「星立天然保護区域 ほしたててんねんほごくいき」(469頁)	新納義馬	『沖縄大百科事典』(下巻)	沖縄タイムス社
1983	「4. 西表島星立天然保護区域のヤエヤマヤシ林の群落構造」(51~74頁)	沖縄県教育委員会	『西表島天然記念物緊急調査報告I』(沖縄県天然記念物調査シリーズ第23集)	沖縄県教育委員会
1983	「干立」(94頁) 「干立天然保護区域」(96頁)	白井祥平・佐野芳康	『東洋のガラパゴス 西表島の自然』	新日本教育図書
1984	「星立」(52~54頁)	田中利典	ジャングルへのいざない 『秘境西表島』	新星図書出版
1984	「沖縄県、八重山地方における植物の命名、分類、利用—比較民族植物学的考察」(25~235頁)	山田孝子	『リトルワールド研究報告』(第7号)	人間博物館リトルワールド
1984	「西表島の『種子取り』ユングドゥ」(127~140頁)	黒島寛松	『群星(ぶりぶし)』	沖縄エッセイストクラブ
1985	「干立」(148~149頁)	崎原恒新	『沖縄の地名の由来—地名語源伝承集成』	月刊沖縄社
1985	「西表の子守り歌」(91~100頁)	黒島寛松	『月桃(さんにん)』	沖縄エッセイストクラブ
1986	「干立村 ほしたてむら」(632頁)	「角川日本地名大辞典」編纂委員会	『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』	角川書店
1986	Ⅲ資源植物の分布調査 4. 集落(3庭園)「表-4. 15星立における人家周辺の植物」(18~23頁)	新本光孝	『西表島を中心とした資源植物賦存状況』	(財)域産業技術振興協会
1989	「ヤエヤマヤシ」(125頁) 「節祭(祖納・星立)」(139頁) 「豊年祭(祖納・星立)」(140頁)	横塚眞己人	『原色のパラダイス イリオモテ島』(改訂版)	新日本教育図書
1989	写真「シイチイ(西表島星立)」(34~35頁)	平井順光	平井順光写真集3 『沖縄の祭』	コミックおきなわ社
1989	「稲が種子アヨー」(176~178頁) 「星立のトゥバラーマ」(232頁) 「無蔵念仏」(285~289頁) 「家崇び」(304~305頁)	編集委員会	『日本民謡大観(沖縄奄美)』(八重山諸島篇)	日本放送出版協会
1990	(二) 道筋と文物「干立御嶽」(85頁) (三) 道筋と村「干立村」(91頁)	里井洋一・石垣金星	『沖縄県歴史の道調査報告書VII—八重山諸島の道』	沖縄県教育委員会
1990	『竹富町関係文献目録』	竹富町	『竹富町関係文献目録』	竹富町
1990	第二章 八重山島嶽々名並に同由来 西表島西北部御嶽位置略図「189. 星立御嶽」(405~406頁) 「190. ムトゥ御嶽」(406~407頁) 「191. 雨御嶽」(407頁) 「192. 穀御嶽」(407頁) 「193. 多柄御嶽」(407~409頁)	牧野 清	『八重山のお嶽』	あーまん企画
1990	「10. 仲良田節」(28頁)	糸洌長良	『八重山古典民謡・古謡全集—五線譜・工工四併記』 【改訂・増補】	糸洌長良

1991	「[写真] 星立」(85～131頁) 「干立のシチ(節祭)」(132～149頁)	比嘉康雄	『神々の古層9-世を漕ぎ寄せるシチ[西表島]』	ニライ社
1991	国の重要無形民俗文化財に指定された西表島の祖納・星立の節祭(シチ)(1)～(5)	那根 元	『八重山毎日新聞』1991年7月26日～8月1日	八重山毎日新聞社
1991	『西表島上村遺跡-重要遺跡確認調査報告』	大城慧・金城亀信 石垣金星	『西表島上村遺跡-重要遺跡確認調査報告』 〈沖縄県文化財調査報告書第98集〉	沖縄県教育委員会
1991	「第29図 祖納・星立の御嶽」(5頁)	金城亀信・里井洋一・石垣金星	『船浦スラ所跡』 〈沖縄県文化財調査報告書第101集〉	沖縄県教育委員会
1992	「第1部 星立わがシマ」(100～111頁)	黒島英輝述・安溪遊地・安溪貴子	『環境に関する民俗的認識と民俗技術的適応』	国立歴史民俗博物館
1992	「慶良間の猿と星立の猿」	黒島寛松	『沖縄タイムス』1992年3月5日	沖縄タイムス社
1994	「写真709. 天空にそびえる星立のヤエヤマヤシ群落」(243頁) 「914. 干立村全図」(297頁)	竹富町史編集委員会	『写真集ばいぬしまじま』 〈別巻3〉	竹富町役場町史編集室
1994	「多目的集会施設落成-干立-」(5頁)	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 〈No.193〉	竹富町役場企画課
1995	「西表干立村シチィ(節祭)」(261～279頁)	石垣博孝	『沖縄船漕ぎ祭祀の民族学的研究』	勉誠社
1995	「節祭」(135頁)	ボーダーインク編集部編	『おきなわ行事・イベントオールガイド』	ボーダーインク
1996	「祖納・干立で「節祭」-来年の豊作を祈願-」(4頁)	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 〈No.220〉	竹富町役場企画課
1996	「(四) 干立-集落の概況」(598～604頁)	竹富町史編集委員会 町史編集室	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 学業より優先した軍事動員」(605～610頁)	通事 勇	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 小野隊での体験」(610～612頁)	平得石蔵	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 忘れられない戦争の日々」(612～615頁)	慶田城寛助	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 戦地で友を失う」(615～620頁)	黒島寛松	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 球六四六一部隊とマラリア罹患」(620～626頁)	平得泰次	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 曾我部隊での軍隊生活」(626～630頁)	崎枝泰明	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 台湾疎開と激しい空襲」(631～632頁)	黒島成子	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 母子三人の台湾疎開」(633～636頁)	西大洋子	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 九死に一生を得て台湾を脱出」(636～637頁)	塩川實隆	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 アテプリン投与とDDT散布」(637頁)	崎枝 進	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1997	『西表島の節祭(干立編)』	竹富町教育委員会	『西表島の節祭(干立編)』 〈竹富町の文化財第5集〉	竹富町教育委員会
1997	「西表の大自然を満喫ヒナイサーラの滝見学-干立子供会-」(7頁)	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 〈No.227〉	竹富町役場企画課
1997	表紙「部落民総出で力強く伝統の網づくり-西表干立-」	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 〈No.229〉	竹富町役場企画課

1997	「島の各地で多彩な民族芸能 五穀豊穡と住民の健康を天地の神々に祈願 祖納・干立『節祭』－豊作と繁栄を祈願－」（4頁）	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 (No.232)	竹富町役場企画課
1998	『詩集 たそがれ』	池城安伸	『詩集 たそがれ』	池城安伸
1998	「伝統芸能は島の誇り－多彩な奉納芸能で天地の神々に祈願－西表島－古式床しく厳肅に祖納と干立で節祭」（5頁）	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 (No.244)	竹富町役場企画課
1998	写真95「西表島星立豊年祭のオホホ、弥勒、猿の仮面」（99頁）、「⑥西表島星立の豊年祭」（100頁）	本田安次	『沖縄の祭と芸能』（南島文化叢書13）	第一書房
1999	「二・西表島の日」「写真16. 星立のお祭」「四・星立のお産と命名式」（124～131頁）	河村只雄	『南方文化の探求－足で書かれた沖縄民俗誌』	講談社
2000	「伝統芸能は島の誇り－多彩な伝統芸能を神々に奉納－西表（祖納・干立）古式床しく厳肅の節祭」（6頁）	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 (No.255)	竹富町役場企画課
2000	「種取り・あよー」（225～229頁） 「うなぎし・ゆんぐとう」（230～234頁） 「ささらにし」（234～237頁） 「ぐごば」（238～240頁） 「ふにぬ・じらば」（240～241頁） 「ふにぬく」（242～244頁）	石垣久雄	『竹富町古謡集』（第三集）	竹富町教育委員会
2000	「節祭」（141～143頁）	ポーターインク編集部	『おきなわ行事イベントの本』	ポーターインク
2000	「海からの侵入者－西表島・星立の節祭のオホホー」（110～115頁）	青井志津	『石垣島、死者の正月』	四谷ラウンド
2001	西表島の遺跡 七、博物館総合調査における遺跡の概要「星立部落内遺跡」（74頁）	大城 慧	『西表島総合調査報告書－自然・考古・歴史・民俗・美術工芸－』	沖縄県立博物館
2001	節祭の衣裳考「2. 祖納・干立の神行事「節祭」（150頁） 「写真17紅型ウチビ（星立）」（163頁） 「写真20星立のウガン・チカの衣裳」（164頁）	伊波悦子	『西表島総合調査報告書－自然・考古・歴史・民俗・美術工芸－』	沖縄県立博物館
2001	「西表島祖納・星立の節祭」（121～130頁）	當間一郎	『西表島総合調査報告書－自然・考古・歴史・民俗・美術工芸－』	沖縄県立博物館
2001	「海神祭で安全と豊漁を祈願～ハーリーで賑わう～3連覇達成に意気揚揚！干立公民館」（7頁）	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 (No.263)	竹富町役場企画課
2002	「干立村」（711～712頁）	平凡社地方資料センター	『沖縄県の地名』（日本歴史地名大系第48巻）	平凡社
2002	「県内一早い「日本最南端の海びらき」宣言!!海びらき前夜祭 干立海岸の特設ステージは大勢の観衆で賑いを見せた」（2頁）	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 (No.271)	竹富町役場企画課
2002	「南の島の夏の風物詩 伝統のまつりで賑わう地域挙げて「豊作祈願」干立－アパレーで豊作を喜ぶ－」（4頁）	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 (No.276)	竹富町役場企画課
2002	「伝統芸能を神々に奉納 西表（祖納・干立）で『節祭（シチ）』が挙行」（4頁）	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 (No.278)	竹富町役場企画課
2002	「やふぬていー・じらば」（185～187頁） 「ていんちよーていんばい」（187～189頁） 「きゆぬふくらしゃ・じらば」（190～192頁） 「ぐしゃくていぬぐい・じらば」（192～194頁）	大城 學	『竹富町古謡集』（第四集）	竹富町教育委員会

2002	「ふにくー・じらば」(195～197頁) 「はやちかい」(197～199頁) 「かびらはやちかい」(199～201頁) 「うしういきよぎん」(202～204頁) 「みりくぶし」(205～206頁) 「とうばいらーま」(207～210頁)	大城 學	『竹富町古謡集』(第四集)	竹富町教育委員会
2002	『《写真にみるわが町》21 千立の農村風景』(1頁)	竹富町史編集委員会 町史編集室	『竹富町史だより』(第22号)	竹富町役場町史編集室
2003	「体験滞在型交流促進施設『イルンティフタデムラ』がオープン地域活性化の起爆剤に」(4頁)	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 (No.284)	竹富町役場企画課
2004	「八重山諸島の狂言資料抄ー西表島祖納村・千立村」(382～383頁)	飯田泰彦	『沖縄芸術の科学』(第16号)ー沖縄県立芸術大学附属研究所紀要ー	沖縄県立芸術大学附属研究所
2004	「第51節 竹富町星立の綱引き習俗」(301～303頁)	崎原恒新	『沖縄の綱引き習俗調査報告書』(沖縄県文化財調査報告書第143集)	沖縄県教育委員会
2005	「家崇び(一)」(169～173頁) 「家崇び(二)」(174～178頁) 「あーばーれ」(178～180頁) 「雨乞い・ちじ」(181～184頁)	大城 學	『竹富町古謡集』(第五集)	竹富町教育委員会
2006	「千立ぬトッバイラーマ」(88～89頁) 「千立口説」(90～95頁) 「仲良田節」(96～97頁) 「祖霊念仏節」(98～101頁) 「ウジラ狂言」(102～104頁)	石垣金星	『西表民謡誌と工工四』	西表をほりおこす会
2006	「25. 千立集落入口の壕」(100～101頁)	沖縄県立埋蔵文化財センター	『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(VI)ー八重山諸島編ー』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第41集)	沖縄県立埋蔵文化財センター
2008	「(10) 千立集落」(26頁)	九州森林管理局	『平成19年度西表島における人と森林との歴史に関する調査報告書』	九州森林管理局
2008	「泡盛古聞録#9 かつて存在した酒造～西表島・千立集落の組合による酒造り～」(63頁)	稲垣千明	『季刊 カラカラ』 (Vol. 28)	伽楽可楽
2009	「千立のカスノキ」(29頁) 「千立のフクギ」(37頁) 「千立のイヌマキ」(38頁)	九州森林管理局西表森林環境保全ふれあいセンター	『西表島の名木集』	竹富町教育委員会
2010	『記録されなかったムラの記憶ー西表島旧稲葉集落の聞き書きー』	松村正治編	『記録されなかったムラの記憶ー西表島旧稲葉集落の聞き書きー』	浦内川観光
2012	「フラワーロード構想：千立婦人会」(164～165頁)	社団法人沖縄県対米請求権事業協会	平成23年度『人材育成支援事業主要刊行コース沿道花一杯事業地域活性化交流事業』	社団法人沖縄県対米請求権事業協会
2014	「千立節祭」(3頁)	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 (No.394)	竹富町役場企画課
2015	表紙の写真「千立村世願」(千立御嶽 2014年4月23日)	竹富町史編集委員会 町史編集係	『竹富町史だより』(第36号)	竹富町教育委員会
2015	「節祭(千立)」(3頁)	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 (No.406)	竹富町役場企画課
2017	「千立節祭ー国指定重要無形民俗文化財ー」(2頁)	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』 (No.425)	竹富町役場企画課

2018	『千立バシマを語る』	向井 進	『千立バシマを語る』	向井 進
2018	「島の昼ごはん」file. 91 西表島千立 中坂家の昼ごはん (24～25頁)	南山舎編	『月刊やいま』(No.290)	南山舎
2018	「台湾引揚げ体験者の記録とコラムー兼久ナヘさんー」(45～48頁)	赤嶺守・仲村春菜・松田良孝・本村育恵	『「沖縄籍民」の台湾引揚げ証言・史料集』	琉球大学法文学部
2019	「千立地域活動報告ー千立の魅力発見 体験プログラム開発講習会」(8頁)	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』(No.437)	竹富町役場企画課
2020	「(3)事例報告：西表島千立」(16～19頁)	一般社団法人与那国フォーラム「与那国民俗芸能の継承に向けた調査・及び人材育成計画事業」事務局	『平成31年度沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業与那国民俗芸能の継承に向けた調査、及び人材育成計画策定事業報告書』	一般社団法人与那国フォーラム「与那国民俗芸能の継承に向けた調査・及び人材育成計画事業」事務局
2020	「く島々の踊り・狂言No.6」千立ぬトゥバイラマ(西表島・千立) (1頁)	米盛恭子	『竹富町史だより』(第46号)	竹富町教育委員会
2020	「やいま news&Topics 西表千立地区の避難路が完成」(6頁)	南山舎編	『月刊やいま』(No.311)	南山舎
2020	「ゆいまーるワークショップ 第1回西表西部地区(祖納・千立・白浜・船浮)」(4頁)	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』(No.447)	竹富町役場企画課
2020	「ゆいまーるワークショップ 第2回西表西部地区(祖納・千立・白浜・船浮)」(3頁)	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』(No.448)	竹富町役場企画課
2020	「ゆいまーるワークショップ 第3回西表西部地区(祖納・千立・白浜・船浮)」(3頁)	竹富町役場企画課	『広報たけとみちよう』(No.449)	竹富町役場企画課
2021	『タナシ修理新調記録集 国指定重要無形民俗文化財西表島の節祭』(千立)	千立公民館タナシ製作実行委員会	『タナシ修理新調記録集 国指定重要無形民俗文化財西表島の節祭』(千立)	千立公民館
2021	「竹富町とコロナ・コレラ・アレコレ」3・年中行事にみる悪疫退散の願い (1) 千立村 (9頁)	飯田泰彦	『竹富町史だより』(第47号)	竹富町教育委員会
不明	西部集落の魅力にふれる「千立」(14頁)、(16～21頁)	(有)開	『バシマ イリムティムラ～西表西部の島歩き～』	竹富町



西表島千立村節祭 2017年11月9日 (撮影：新城良乃)

編集後記

表紙の「仲間橋開通式」(1992年)から、来年(2022年)は30年の節目を迎えます。写真の小学生たちも、仕事や地域活動でも中心となる世代に成長しているはずです。

今回、仲間橋開通式についてお話をうかがった、西大舛高旬町長も当時は竹富町議会議員として現役バリバリの45歳。開会式や祝賀会の写真に若かりし自分の姿を見つけて懐かしそうです。また、写真に写る先輩方の名前を一人一人挙げながらの思い出話に時間も忘れるほどでした。このとき仲間橋は、人や車やモノを運ぶだけでなく、まさに「時代の架け橋」とも換言できます。

さて、『竹富町史だより』〈第48号〉では、先に発刊された『竹富町史 第十一巻 新聞集成 VIII』に関する論考を掲載しています。どれも読み応えのある内容になっています。

「それぞれの島で必死に生きる人々が見えるようだ。」(慶田盛 伸)

「読む人の切り口によっていろいろな成果が期待できるのも資料集の良いところ。料理のしかたは貴方次第です。」(與那國光子)

「東京オリンピックの競技を観て手に汗握り、ビートルズの《girl》を熱唱するグループサウンズのザ・タイガースの姿に「シビレタ」(西前津松市)

これらは、「ひとつひとつの記事に当時の竹富町民がどのような思いで関わったのかといった考察」や、「島の内側からの視点で検証していくこと」(『新聞集成 VII』参照)の目的を実践しており、竹富町史の基本構想と響きあうものです。各氏の寄稿を読まれた皆様も、改めて『竹富町史 第十一巻 新聞集成 VIII』を手にとっていただき、歴史を自分事としてふりかえる契機にしていただければと思います。

ところで、今年も残り3カ月。コロナ禍において、東京オリンピックはなんとか開催されましたが、国内、県内、地域の祭りやイベントなどが、軒並み延期や中止の報道が続きました。政府の緊急事態宣言により、沖縄県民は長い長い3カ月の自粛生活を送ることに。

豊年祭、結願祭、節祭、種子取祭などの伝統行事はもちろんのこと、地域の芸能祭や学校行事の数々も、延期、中止、自粛、縮小され、文化継承の緊急事態を迎えています。

「今年の種子取祭も神事だけになったよ」、「踊りも忘れてしまったさー」とは、竹富町史編集委員長・石垣久雄氏の言葉。このような言葉からは、祭祀が古謡、民謡、舞踊、芸能などの伝統文化を継承し育む母体となっていることに改めて気づかされます。また、着物の着付け方、行事料理の作り方や盛り付けに至るまで、一つ一つの事柄が、祭りを構成する大切な要素があることを再認識しました。

かつて人口の流出や過疎を経験してきた地域では、途切れてしまった祭りや行事の再現にたいへん苦労したと聞きました。過去の経験を生かし、伝統文化を継承する意味においても、親から子へ、子から孫へ、先輩から後輩へ…というように、一人一人が「架け橋」であることを自覚したいものです。

(米盛恭子)

2021年10月29日発行

竹富町史だより

第48号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市新栄町6-18-3F

TEL 0980-87-6257

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp